

研修事業紹介記事

“特集「保育の質」を考える②”

子ども・子育て支援新制度において質の高い幼児教育・保育の提供が目的の一つに掲げられ、世界的にも質の高い就学前教育の効果に関心が高まっている今、「保育を考える」をテーマに意欲的な取り組みを追っている。今回は、市を挙げて保育の質向上のため研修の充実を進めている京都府舞鶴市の実践を取り上げる。研修事業を通じて、保育者の意識も変わりつつあるという。また、後半では、前号の大豆生田啓友・玉川大学教授のインタビューに続き、墨田区での「子ども主体の協同的な学びプロジェクト」の実践例を紹介する。

舞鶴市の「プロジェクト型保育推進事業『保育の質の向上研修』」の取り組み

舞鶴市では、「プロジェクト型保育推進事業『保育の質の向上研修』」と称して、市を挙げて保育の質の向上に取り組んでいる。

人口約8万5000人の同市には、幼稚園は公立1園、私立12園、保育所は公立3園、私立13園の就学前教育がある。年間出生数は800人を下回り、年々少子化が進んでいる。子ども・子育て支援事業計画の論議が進む中、待機児童はおおらず、当時はまだ保育士の人材難にも見舞われていなかったため、保育の課題が見えにくかった。一方、保育の内容については、小学校との連携が重要視される中、公私の保育所で連携について学び合い、日々の保育こそ重要であることを再確認。保育を見直していこうと話し合い、市を挙げて保育の質向上の研修に取り組みこととなった。平成25年度から、神戸大学の北野幸子准教授を定期的に招き、園内研修の充実を図っている。

これまでの研修の実績を振り返ると、



これまでの取り組みをまとめた報告書

ここで言う「プロジェクト型保育」とは、「子どもの主体性を尊重し、子どもの興味や関心を起点として経験を深めていくもので、学びにつながる探究活動」を指す。北野准教授は、「『保育の質』のアンチテーゼ（反対の命題）は、お稽古事や指示命令が多いシナリオ通り行う教授主義的な保育であり、環境を通じた主体的な保育ができていないこと」と指摘。プロジェクト型保育は、環境を通して保育の一例であり、子どもが主体的に遊ぶ中で保育者が学びを見とって保育を展開している姿を分かりやすく表現したものだとしている。

さらに、プロジェクト型保育のモデルとも言えるイタリアのレッジョ・エミリアでは、自分たちのプロジェクト型保育を伝える手段として、学びのプロセスを会話や写真などで記録したドキュメンテーションという手法を開発したことを挙げ、記録の在り方も重要な研修課題と位置づけている。

研修アドバイザーの話を待ちかけられたことに対して、北野准教授は、同市で保育所の民営化によりベテラン保育士が市の保育管理部門に配置され、保育の中心について指導・監督ができるようになり、保育の質に関するこうした研修の重要性

を問題提起できるようになったと評価。ただ、保育の質の向上のためには保育を公開することが必須だと考えていたため、引き受けるにあたっては全園での公開保育の実施を条件とした。実際のところ、公開保育をしなくてはいけないという義務的な取り組みでは効果が見込めないため、やりたい園を少しずつ増やしていく方針としている。

公開保育の重要性については北野准教授は、「第三者が継続して実践を見て、実践を語り、ここはこうした方がよいなどと話し合うことができると保育も変化し、保育者もやり甲斐を持ちます。研修の翌日に子どもへの声のかけ方や環境設定など、行動が変化します。実際の自分の実践の変化につながるような能動的な研修ではないという意味がありません。そうした公開保育も実施していただけたらいいことに引き受けました。これは私にとってもチャレンジングだったのです」と振り返る。

保幼小連携には保育内容が大事と市を挙げて保育の質向上へ

また、子ども・子育て支援新制度を通じた、保育の質向上に向けた取り組みが制度化されることにも期待を寄せる。「新制度では、機能としては、保育所型の地域に根差しながら、長時間子どもを受け入れる乳幼児専門の施設が望ましい。ただ、就労形態については、公立幼稚園モデルとすべき。朝から午後2時程度までは子どもと接し、午後2時以降、担任は子どもと触れ合わずに、環境設営や教材研究、記録などができる。子どもと接しない時間も保障される。幼稚園教育要領も保育所保育指針も幼保連携型認定こ

子ども園教育・保育要領も『環境を通じた保育』を謳っているのであれば、環境設定や教材研究は保育者の仕事ですから、そのための時間を確保できるよすにすべきです」と話す。

その上で、保育所に公開保育などの研修が困難な状況について、保育所保育指針において保育者個人の研修の努力義務だけに依存している点を問題視。「幼稚園では、教育基本法第9条（教員）法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。2前項の教員については、その使命と職責の重要性にかんがみ、その身分は尊重され、待遇の適正が期せられるとともに、養成と研修の充実が図られなければならない」ということについて、保育所保育士としてプロジェクトに参加し現在では同市子ども育成課に配属され事業を担当している飯田美和氏は、「すべての園がプロジェクト型保育の趣旨を理解されているかという点に難しいように感じている。ただ、子ども主体の保育を展開するようになってはいけないということに意識するようになってきた」と現状を語る。行事をいきなりなくすわけにもいかないだけに、今までの保育形態をとりつつ、一つでも子ども主体となる要素を取り入れる工夫をしていると説明する。

子ども主体の保育が少しずつ浸透 「させる」という言葉が消えて

北野准教授も、「『子どもに何をさせればよいか』という言葉ではなく、『この子が今、何をしたいのか』という視点に変わった」という言葉をいえる保育者から聞き取った」と保育者の変化を語る。「そうなるにつれて、保育は楽しい。保育において子どもを見るのであれば、子どもの考えや気持ちを知ろうとする方が楽しい。そういう子どもたちの気持ちに洞察することが結構浸透してきているのではないかと見る。

同事業を通じた子どもや保護者の変化については、ドキュメンテーションが保護者の園への関心を高めていることが指摘されている。写真と文章でその日の活動を記録して報告すると、そのドキュメンテーションを読む保護者が増えていくほか、自分の子どもの学年だけではなく年上のクラスのドキュメンテーションを楽しむ様子も見られるという。

また、北野准教授は、「今までは花が綺麗だからと持ってきてくれたいた保護者が、『これを教材に使ってほしい』と、教材という言葉を使ってくれたことが嬉しかった」と喜んで報告してくれた園長の話も聞いた。保護者の関心が保育における遊びの中の学び、つまり教育内容に向いていることを物語るエピソードだ。

飯田氏は、ドキュメンテーションに子どもが変化している姿をしっかりと盛り込むようにしている点を指摘し、保護者の理解が深まったと見る。

また、北野准教授は、保育を見合う効果を指摘。ドキュメンテーションとは何かということについて書き方も含めて講演した後、実践している園の全クラスのドキュメンテーションを研修会場の壁四面に張り出したことを紹介した。全クラスのドキュメンテーションを持ち寄ることで、同じ年齢についての園でどのように記録されているのを見ることができ、どんな場面を取り上げるかという視点を見比べることも可能となる。「『子どもの指先や目線の写真を撮りましょう』と私が言うより、自分の写真はポートレート写真ばかりだが、他の園の保育者の写真は子どもが覗き込んでいるその先をターゲットとした写真があると

自分で気づく。自分で気づくことと変わる。だから見せ合うことが大事なのです」と北野准教授は解説する。

ドキュメンテーションや保育を見合い 自分の課題に自分で気づく

公開保育の3回目くらいになると、各保育者が自分から課題などについて多弁になるなど大きく変化。お互いで助言しあうなど、「大変だけれどやってよかったという感じが広がっている」と効果が広がっているという。また、ポートレートの写真がなくなると、ドキュメンテーションの中身も変化している。

今年度は、教育委員会との合同事業となっており。さらに、「幼児教育ビジョン」の作成にも取り組んでいる。保育所・幼稚園から小学校、中学校までの教員が参加する作業部会を設けて話し合っている。北野准教授は、こうした取り組みについて、「この取り組みによって、保幼小中で地域の次世代育成の同僚性を作ることができるとよいのではないか。中学校の先生と乳幼児期のその子どもがどうだったのかと話し合える」と期待する。来年度以降以降にながら幼児教育ビジョン作成をと意気込んでいる。

公開保育を実践したり、ドキュメンテーションに取り組んだりする園には市から研修費が出ている。北野准教授は、研修費の支援方法についても、研修のための人件費以外に使えないようにするなど、確実に研修が行われるような制度化が望ましいと指摘。研修を単位化して待遇に反映させるといった教職員改革の構想を保育でも参考にすべきと訴えている。

特集【第4弾】

子ども・子育て支援制度と

乳幼児期の教育について考える

「質の高い乳幼児期の学校教育・保育を総合的に提供」するためとして、幼稚園類型認定ことも園をその中核的施設とする子ども・子育て支援制度が施行されました。一方で、保育園と幼稚園も選択制の下で併存しています。

私たちは、基本的に「学校で学ぶ教育」と「保育を体験する教育」とをどうに理解し、行っていけばよいのでしょうか。また、乳幼児期の子どもに真に必要な「教育」とはどのようなものなのでしょうか。そこで、日本の教育の根幹をなす「教育基本法第1章（教育の目的及び理念）第1条（教育の目的）」に基づきながら、理事長と委員の方々に、数回にわたり論じていただきます。

「教育」は保育、そして「保育」は教育

シヤリリスト・東京都大学客員准教授 猪熊弘子

つい最近のことだ。「教育」と「保育」という言葉がもつ意味について、深く考えさせられる機会に二度遭遇した。

「教育」という名を借りた「ビジネス」

一度目は、都内のとある保育施設を訪れた時であった。都心の一等地に立つ高層ビルの中にあるその保育施設では、外国人を含むハイソアエライな人々の子どもたちへの「教育」が行われているという。案内され

た応接ルームは、高級ホテルのような落ち着いた雰囲気でも、高級な家具や調度品がセンスよく置かれていた。インターナショナル教育のための英語のプログラムが導入されていることから、壁面には英語で書かれた装飾が貼られている。保育室はマンションのモデルルームのよう美しくデザインされ、高級な玩具が用意されていた。「アクティブラーニング」のために、英語や芸術活動、科学、音楽など、時には専門家が行うさまざまなメニューを設け、そこに通う子どもたちが遊びの中からさまざまな学びを得られるようになり

キエラムになっているという。その日はちょうどハロウィンで、おしぎれに仮装した子どもたちと保護者たちが、その高層ビルの中の広場へと繰りだしていくところだった。外国人の子どもも多く、まるで雑誌やテレビのハロウィンの特集から飛びだしてきたかのような光景だった。認可保育所も含め、多くの保育施設を運営している経営者は、現在の「保育」に対する考えをこんなふう

に語っていた。「働く母親たちは、子どもにいろいろな経験をさせて

ほしいと願っている。保育園に預けている10時間が空白の時間であってほしくないはず。ただ預けるだけでなく、そこに通うことでアクティブラーニングの効果が期待できるような選択肢があってもいいのに。今の認可保育所の制度では親が選ぶことができない。理想の教育は、助成金を受けてやりくりする認可保育所では禁じられていてできない。保育の質にまで話が及ばないのは悲しくもきこたえ

た。私は15年間にわたり、4人の子ども全員を0歳から認可保育園に預けてきた保護者でもある。それぞれの子どもたちが保育園で過ごす時間は、のべ24年間にもなる。その時間が、彼らにとつての「空白」だったといわれたに等しいのだから。

私は「納得できない」と異議を唱えた。そもそも認可保育所を運営することで、企業全体の経営を安定させているはずだ。その現実を無視して、認可保育所ですべて時間を「空白」などというなら、認可保育所など経営しなればいい。まとも運営している認可保育所は「空白の時間」なのだろうか、そこに通う子どもたちがかわいそうだ。

私が訪れた施設も、確かに都営的に美しく整えられているが、厳しい見方をすれば、都会にありながら園庭のないビルの中の認可外保育施設に過ぎない。もちろんカリキュラムには見外でのアクティビティもあるよなだったが、子どもたちが自然に触れ、泥だらけになって思いきり遊べるような公園は、その施設のそばにはない。

経営者がいうところの「アクティブラーニング」の効果とは、いったいどんな効果なのだろう。外国人教師について英語を話せるようになることなのか。プロの美術教師に習って「上手な」絵を画くことができるようになることなのか。プロの演奏家が奏でる音楽を自分も演奏することができることなのか。それは「アクティブラーニング」といえるのか。

それらのプログラムは、子どもにとつての「幸せ」なのか。子どもたちが複雑で先の見えない未来を生き抜いていくための力になるのだろうか。

その施設に週5日間、夕方5時まで預けた時の保育料は、1か月25万円ほどになるという。加えてそれとは別に、「入学金」として20万円以上が必須だ。

1人の子どもの毎月が5万円以上の保育料を出せるほど富裕な親だけが、子どもに「理想の教育」を受けさせることができる世界なのだ。そんなお金を払うことなら到底できないわが家の子どもたちなどは、「理想の教育」を受けることができないところが、よかれと思って預けた認可保育園で「空白の時間」を過ごすを得ない、というのかもしれない。

東京には、そういう上層の人たちの住む世界が確かにある。有名私立小学校受験や、インターナショナルスクールへの進学も、階層層では当たり前に行われているものだ。だから、話をうかがったその保育施設の経営者を単純に批判する気はない。

しかし、親がお金を積んで子どもに買いつけるようなものは「教育」だとは思えないのだ。それは、ただただ「教育」という名を借りて保護者を不安に陥れる

「ビジネス」に通さないのではないかと思う。「教育」は、義務教育であるかにかかわらず、そしてそれがどの場所で行われるとしても、国民の誰もが必要時に必要なだけ、等しく受けられるべきものでなくてはならないはずだ。憲法第26条には、「すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する」と定められている。

「能力」は親の経済力ではなく、子ども自身の「能力」でなければならぬ。

今、現実には、そして裕福ではない普通の親だとしても「子どもたちに何かをやらせなければ」とばかり「保育」と「教育」という言葉の間で揺れている。保育園の2歳児クラスの親から、3歳児クラスになるのを前に「このまま保育園に預けていて大丈夫でしょうか？」という相談を何度受けたかわからない。保育園での「保育」が「教育」ではないという法律上の区分が、保育園に子どもを預けている親たちをさらなる不安に陥れ、教育とビジネスの横行はさらに拍車をかけている。

2歳児の保育実践の中で見た子どもたちのきらめく学びの瞬間

それからほどなくして、私は「保育」と「教育」について深く考えさせられる度目の機会を与えられた。日本海側のある市の認可保育園の公開保育に参加した時のこと。その保育園は、古くからその地にあるお寺に併設された園で、木をふたんに使った重厚な木造の風景が目につく。都会の高層ビル群の中の保育園とは思えない、自然に囲まれて穏やかな時間が流れる

※2015.11.11公開保育(東山保育園)


「子供の未来応援国民運動」が開始しました

2015年10月1日から、いやゆる徳国の連綿によって子どもたちの将来が懸念されることなく、夢と希望をもって成長していける社会の実現をめざす「子供の未来応援国民運動」が開始しました。

■主な内容

- 1 「子供の未来応援国民運動」ホームページの開設
国、都道府県、市町村等が行う支援情報を一元的に集約したポータルサイトや、企業等による支援、NPO等の振興を支援するプラットフォームを開設しました。賛同の現状にある子ども及びそのご家庭の方、またその支援者の方々に必要な支援情報をご覧いただけます。
- 2 「子供の未来応援基金」の創設
「子供の未来応援基金」への寄付金の受入をスタートしました。いただいた寄付金は、国の振興を支援しているNPO等に对于する支援や、子どもたちの「居場所」となる拠点を創設して子どもたちの「生きる力」を育むための取り組みの提供に使用させていただきます。サービスの利用や寄付はリンク先のホームページから可能ですので、よろしくお願ひいたします。

■詳細については、以下のURLをご覧ください
「子供の未来応援国民運動」ホームページ
<http://www.kodomothink.jp/>



空間だ。

公開保育の開始とともに、園庭では3〜5歳の子どもたちが木工作品づくりや、砂遊びに興じていた。砂山をつくり、溝を掘って水を流し、橋をかけていく子どもたち。タネとカナヅチを手にし、木材の切れ端をつないでは、何かに見立ててみるような遊びが盛んである子どもたち。木片を箱に置き、そこをレールに見立てて電車ごっこをする子どもたち。

大人ではとても考えつかないような創造的な遊びを展開している子どもたちの姿を見ながら、私は先日聞いた「空白の時間」という言葉思い出していた。子どもたちが、自分の興味を伸ばし、考え、さまざまなものをつくりあげていく様子を見れば、この時間が決して「空白」などではないことはすぐにわかる。子どもたちが、誰かにいわれるでもなく、自分が「やりたい」という気持ちや興味から新たなものをつくりだしていく様子は、「アクティブラーニング」という言葉で語られる「教育」そのものではないか。

その思いが確信に変わったのは、2歳児クラスでの子どもたちの様子を見た時だった。

その日、2歳児のクラスでは小麦粉粘土遊びが行われていた。子どもたちは4、5人のグループに分かれ、足を畳んで床に置いたテーブルを囲んで座っていた。保育者がボールに小麦粉を入れ、粉のサラサラ感を子どもたちに手で触らせて感じさせた後、水を入れてこねていく。澄々と黄白色、緑、ピンクなど、各テーブルで違う色を付けると、子どもたちは競って小麦粉を練りだす。保育者たちは「どんな感じ?」「次はどう

なるかな?」というように、ていねいで優しい声かけをして、子どもたちの興味を引きだしていき、それぞれの子どもたちに粘土が手渡されると、子どもたちはその粘土で自分の好きな形をつくり、あらかじめ各テーブルを用意されていた木の葉や枝を粘土に埋め込めたりして、自分だけの作品をつくっていく。

私は、一人の男子の子が、赤い木の葉を指でつまみ、それを一つ一つ、丸く形づつた自分の小麦粉粘土に埋め込んでいる様子に釘づけになった。男子の子は隣の友だちの様子などもまよまよと見たり、ひたすら自分の作品に集中していた。彼は目をしつかり見開いて、何度も粘土と木の葉を見比べ、そこに木の葉を置いたらいかじつくり考えていた。「コレ」と決めた木の葉を選ぶと、その木の葉を落とさないように慎重に指でつまみ、粘土の上に置き、指先で力を入れて粘土に押し込んでいた。力を入れ過ぎると、粘土の中に木の葉が埋もれてしまふが、ただ置いただけでは木の葉は転がっていつか消えてしまう。そのことに気づくと、彼はさらに自分の指先に集中して、慎重に木の葉を粘土に埋め込んでいく。

やがてその男子の子も含め、子どもたちは隣のテーブルの友だちが持っている粘土の色が違ってくることに気づく。先生たちが「お隣のテーブルのお友だちの粘土はどんな色だろう」と声をかけたからだ。子どもたちは顔をあげ、まわりの子どもたちの様子を見た。子どもたちは「ピンクがほしい」「黄色がいい」と、隣のテーブルの友だちに声をかけ、互いに違う色の粘土を交換したり、違う粘土の色を選んだり始めた。それはまさに

知っているだろうか。保育の関係者の間では常識であっても、知らない人のほうが多いだろう。「保育などないものではない」と思っている日本中の保育者を知らない人たちに伝えてあげたいと心の底から思った。

この保育園で、子どもたちがそこまですべて集中して遊んでいたのは、保育者から何かを「やらされ」たり、「○○しなさい」と置かれたり、「こうやって遊ばなさい」と教え込まれたりしなかったからだ。確かに「小麦粉粘土」という素材は保育者たちから与えられたものだが、保育者たちのあたたかな声かけによってその素材に子どもたちが興味をもたせ、自らが「やってみよう」「やってみよう」という気持ちになったから、真剣な遊びが自然に生まれていく。これこそが、子どもたちが主体的に遊びの中から学びを得ていく「アクティブラーニング」そのものの姿ではないか。

その時、私はふと思った。考えてみれば、この子どもたちは「2歳」である。「子ども・子育て支援新制度」においては、早稲認定の子どもであり、児童福祉法第6条の第7項に規定されている保育を受けている子どもたちなのである。つまり、法律上この子どもたちは「教育」を受けていないことになる。

この一連の流れが「教育」ではないのだとしたら、何が「教育」だというのか。

美しく整えられ、泥や砂とも隣接された清潔な箱の中で、貰ったお金を払って「習字家」に「教えられる」ことよりも、保育者から愛情あふれた言葉を受け、愛情に基づきさまざまなケアを受け、見守られながら

遊ぶ時間のほうがより「教育」という言葉にふさわしい。それが1歳〜2歳の子どもであっても同様である。

つまり、「教育」は保育であり、「保育」は教育なのだと思ふ。教えるだけでなく、覚えさせたり、やらせたりするのではなく、子どもたち一人ひとりを大切に、見守る「保育」を行う中で、子どもたちがそれぞれ自分の興味や関心、やりたいと思う気持ちを伸ばしていく。それが「教育」なのだと思ふ。

「教育」という言葉も「保育」という言葉も、その法律上の規定など、目の前の子どもたちにとっては何の意味もなさない。それが「保育園」でも「幼稚園」でも「こども園」でも、その仕組みや法律上の規定がどのようにになっているかは問題ではなく、むしろその中で子どもたちがどのような遊び、いかに学んでいるかほうが重要だ。遊びを主体とし、子ども自身が遊びながら自由に自らの力を伸ばし、保育者は愛情深く子ども一人ひとりの存在を慈しみ、守ることが必要である。「教育」と規定されている幼保連携型認定こども園になったからといって、それが「教える」をしなさい、それは「教育」とは呼べないだろう。

実際に、私は全国の幼稚園や認定こども園の保育をしよらぬ園長に行っているが、今は「保育園だから」「幼稚園だから」「こども園だから」ということではなく、保育の中身そのものは変わらないのだ。

**子ども一人ひとりを大切に
愛情深くあたたかな保育を**

私は貴族から、保育事故など、とちからといえは、

に、子どもたちの興味を「自分」から「仲間」に広げていく瞬間だった。保育は集団でするものだから「自分」だけがよければいいわけではない。じつに1時間以上の間、真剣に粘土遊びに取り組んでいた。保育者たちの声かけがじつにあたたかく、愛情にあふれていた。子どもたちは確信に、豊かで、幸せな時間をすごしていた。きつこの幸せな時間を家庭に持ち帰る、つたない言葉であっても、子どもたちは自分がすごした幸せな時間を親たちに伝えていることだろう。

2歳の子どもたちがこれほども集中して一つのことに取り組むことができること、とれだけの人が

保育の現場についての問題を取材することが多いのだが、最近特に、子どもたちに対する愛情のかけらもない、保育と呼べない保育に出会い、怒りを感じることが増えている。劣悪な環境で、ギリギリの人員で保育せざるを得ない保育施設で働く保育者の中には、子どもに愛情など感じていたら保育はできない。作業を思わなければ到底働けない」といえる人もいた。

愛情のない保育には子どもたちの人権もない。「この保育者は子どもたちに愛情があるのだろうか?」と感じた瞬間に出会うことも少なくない。楽しかった泥んこ遊びの後、子どもを大声で怒鳴って一列に並びせ、ホースで水と水をかけて泥を洗い流す場面を見て、こんな洗い方をすればならぬ泥遊びなんかしななければいいのにと思つたこともあつた。午睡中の5分おきの睡眠チェックのために、保育者が乳児の上をまたいで歩き、口の前に手を当てて息を吐いているかどうかを確認している様子を見て、これは「保育」ではなく、ただの「作業」だと感じることがあつた。

「乳幼児期の教育」に必要なことは、保育者が愛情深く子どもに接し、子ども一人ひとりの存在や命を大切にすること、ただそれだけではないか。

「教育」という名を借りた不安定な土壌に負けない、子どもたち自らの学びを大切に「教育」と、子どもも多くの豊かな愛情に基づいて「保育」をきちんと各園で行っていくことが、今最も求められることである。そういつたたくれた基礎の前には、年齢や施設によって「保育」「教育」の区別をするような法律は何の意味もたない。そのことだけは明らかにしておきたい。

質向上へ 保育を開く

横浜市幼稚園教育研究大会開催

幼保の枠超え定期的に研修

公益社団法人横浜市幼稚園協会（木元茂会長）は第53回横浜市幼稚園教育研究大会を1月23日に横浜市内で開催。「保育を開く・園内研修の工夫」というテーマで、今後求められる主体的な学び、問題解決能力の基礎を育むために、どう保育を変えていくべきか。地域、保護者、他園に保育を開き、質の向上に取り組む実践が多く発表された。

記録作成、子どももの目線に

シンポジウムのコー・くべきかを考えたい。舞鶴市では公・私立も・子育て支援新制度ディネーターを務めた京都府舞鶴市、大阪府や幼稚園・保育園の枠開始を前に、子ども主のは関東学院大学専任 豊中市の認定こども園を超えた研修が活発に体の遊びを中心とした講師の三谷大紀氏。せりりひじり幼稚園・行われている。その立「皆さんが取り組むひじりにじり保育園 役者は、同市子ども育々の保育の営みがい（安達園長）の取り 成課の飯田美和氏。かに社会的に意味がある組みや、幼児教育に関 かつての同市では、るか。それを発信する 海外の研究などを 昔ながらの一言保育が ためには何をやってい 紹介した。 メーンだったが、子ど



保育に改めていく機運を聞いても、なかなかが高まる。「自分たち園の保育は変わらな公立だけでは市全体のい。都市部の研修に参質は良くなりないう、加すると一日がかりに公・私立を問わず舞鶴なってしまう地理的条市全体の保育を向上させたいことを目指した。

もともと研修自体には熱心な自治体だったが、単発の研修で講演を公開し、アドバイスを受けるながら保育者で改善していくという試みをはじめた。行政が幼稚園、保育園を善き込み、研究者をつなげる役割を果たした。こうしてスタートし、こうして書きものが苦手な保育者も目線の先には何があるのかという深層的な視点に変化した。今後はこうした研修で専門性を高めた保育者について、新たな表面的な視点から、何に興味・関心を持ち、キャリアパスが与えられるような、制度レベルでの改善も目指しているという。

ニュースレター

平成27年度 第1号

幼児教育・保育の質の向上研修ニュース

発行日 平成27年5月23日
 発行者 舞鶴市教育委員会
 舞鶴市健康・子ども部

平成27年度 幼児教育・保育の質向上推進事業

幼児教育ビジョン（仮称）の策定、幼児教育・保育の質の向上研修 ～保育園・幼稚園・小学校・中学校が一緒に取り組みます～

舞鶴市では0歳～15歳までの一貫した質の高い教育の充実・強化に取り組みます。中でも乳幼児期は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期です。しかし、現在、市には0歳～就学前の乳幼児期の指針やビジョンはなく、幼児教育・保育に関わる各機関の自助努力に委ねられています。そこで、学識経験者、乳幼児教育・保育に関わる専門職、保護者、学校関係者等の協力のもと、舞鶴の乳幼児教育の基本となる方向性を示す「幼児教育ビジョン（仮称）」を作成することになりました。

また、0歳～就学前までの質の高い乳幼児教育・保育の充実を図るため、「幼児教育・保育の質の向上研修」を実施し、研究・実践します。私立、公立保育園が実施した平成23・24年度「保小連携推進事業」と、平成25・26年度「プロジェクト型保育推進事業～保育の質の向上研修～」の流れを継承し、「子どもを主体とした保育（プロジェクト型保育）」と「保幼小連携」を柱とした研修を実施します。ご指導いただくのは、神戸大学大学院 北野幸子准教授、鳴門教育大学大学院 木下光二教授のお二人です。また、今回は、小学校からも朝来小学校、岡田小学校の2校にモデル校として参加していただき、更に充実をしていきます。

（詳細は裏面）

モデル園・小学校

【子どもを主体とした保育（プロジェクト型保育）】

永福保育園
 タンポポハウス
 東山保育園
 やまもも保育園
 中保育所

【保幼小連携】

朝来小学校
 朝来幼稚園
 岡田小学校
 岡田保育園

【幼児教育実践】

舞鶴幼稚園

事業概要

幼児教育・保育の質向上推進事業

幼児教育ビジョン（仮称）策定

本市のタカラモノである子どもの将来像や、目指すべき方向性を示すもの

懇話会

学識経験者：神戸大学大学院 北野幸子准教授
 兵庫教育大学大学院 満達和成教授
 幼稚園長、保育園長、小学校長、中学校長、民生児童委員、教育委員、PTA、子育て支援関係、市民他
 ※委員のそれぞれの立場から、舞鶴の幼児教育・保育に対する意見を交換し、議論を深め、ビジョンを提案します。

作業部会

各保育園、幼稚園、小学校、中学校より約40名
 ※懇話会の議論を受けて、グループに分かれ、各グループのテーマごとに議論を進め、ビジョンのたたき台を作成します。

幼児教育・保育の質の向上研修

子どもを主体とした保育（プロジェクト型保育）

神戸大学大学院
 北野幸子准教授

※モデル園の公開保育・事後のカンファレンスを通じて、研究者の指導のもと公開園と参加者が共に学び合います。また、可視化の手法であるドキュメンテーションについても学び合います。

保幼小連携

鳴門教育大学大学院
 木下光二教授

※モデル園・小学校の連携活動の公開保育・授業を通じて、研究者の指導のもと保幼小の連携について学び合います。

幼児教育実践のための調査研究・研修

お知らせ

後日ご案内いたしますので、ぜひご参加ください

【子どもを主体とした保育】

～中保育所 公開保育～
 <日時>平成27年6月18日（木）10時～
 <場所>公開：中保育所
 カンファレンス：林業センター

【保幼小連携】

～岡田保育園・岡田小学校 公開保育・授業～
 <日時>平成27年7月2日（木）10時30分～
 <場所>岡田保育園

幼児教育ビジョン（仮称）策定

舞鶴市の学校教育では、子どもたちに「確かな学力」「豊かな人間性」「健康や体力」など、知・徳・体のバランスのとれた『生きる力』を身につけることに重点をおき、子どもたちが夢を育み、夢に向かって、自らの将来を切り拓き、力強く生き抜く力を身につけるために、小中の一貫した教育を目指しています。

その生きる力の基礎を培う0歳～就学前の乳幼児教育・保育について、幼稚園長、保育園長、小学校長、中学校長、民生児童委員、教育委員、PTA、子育て支援関係、市民等の子どもに関わる皆さんと共に議論を深めます。その中で、幼稚園教育要領、保育所保育指針に基づいた乳幼児教育・保育を基本とし、舞鶴の子どもをどう育てていくのか、目指すべき将来像や方向性を示す舞鶴版の幼児教育ビジョン（仮称）を策定します。

幼児教育・保育の質の向上研修
子どもを主体とした保育（プロジェクト型保育）

なぜ、子どもを主体とした保育が、今、注目されているのでしょうか？その背景には、少子化による子ども同士の関わりや減少や家庭の意識の変化、地域社会の変化があると考えられます。これからの社会を生き抜いていくためには、基礎を培う乳幼児期に、指示待ちではなく自分で考え、自分で判断する力、知っている知識を使って工夫する力…自分の意見も言える、相手の意見も聞ける、人と関わる力…等様々な力を育てる必要があります。

このような力を育てるには、安心・安全な環境の中で、遊びや五感を使った体験を通じて、やってみよう、なぜだろう？知りたい気持ちが生え、さわる、親しむ、ふれあう、調べる、育てる、わかった、の積み重ねで、自分でやろうという意欲や、自分でわかった、すごいと感じる自己肯定感が必要です。（北野幸子先生の言葉より）

このような保育が求められる中、意欲や自己肯定感、主体性を育てる保育を実践するために、子どもとどう関わりどう声かけをし、遊びの中の育ちや学びを見つけ可視化するのか、研修を通じて学びます。

幼児教育・保育の質の向上研修
保幼小連携

幼稚園・保育園などの遊びや生活を通じた学びと育ちを基礎として、小学校生活の中で、主体的に自己を発揮していくことが大切です。そのためには、幼児期の学びの芽生えを児童期への自覚的な学びへと連続させることが重要です。

それぞれの発達や学びの違いを認識し、互いに理解し合うことを保幼小の連携活動を通じて学びます。研修では、年長児と1年生の合同授業・保育を公開し、学び合います。

※学びの芽生え…楽しいことや好きなことに集中すること（夢中になること）を通じて、遊びを中心として頭も心も体も様々な対象と直接関わりながら、総合的に学んでいく。日常生活の中で様々な言葉や非言語コミュニケーションによって他者と関わる。

※自覚的な学び…学ぶことについての意識があり、集中する時間とそうでない時間の区別がつき、自分の課題解決に向けて、計画的に学んでいく。各教科ごとに授業を通じて学んでいく。主に授業の中で、話したり聞いたり、読んだり書いたり、いっしょに活動していくことで他者と関わる。

年間計画

研修期日	研修名	内容	場所
5月23日(土) 午後	講演会 ※幼児教育ビジョン策定委員会と 同時開催	講演「幼児教育・保育とは」	中総合会館 4階 コミュニティーホール
6月18日(木)	子どもを主体とした (プロジェクト型)保育	公開保育・カンファレンス 講義:ドキュメンテーション等	公開:中保育所 講義:林業センター
7月2日(木) 午前	保幼小連携	公開授業・保育、カンファレンス	公開:岡田保育園 岡田小学校
7月13日(月) 午後	子どもを主体とした (プロジェクト型)保育	公開保育・カンファレンス 講義:ドキュメンテーション等	公開:永福保育園
8月予定	保幼小連携 ※生活科研究会と合同開催予定	保幼小連携研修	
9月15日(火) 午前	子どもを主体とした (プロジェクト型)保育	公開保育・カンファレンス 講義:ドキュメンテーション等	公開:やまもも保育園
10月15日(木)	子どもを主体とした (プロジェクト型)保育	公開保育・カンファレンス 講義:ドキュメンテーション等	公開:タンポポハウス
11月11日(水)	子どもを主体とした (プロジェクト型)保育	公開保育・カンファレンス 講義:ドキュメンテーション等	公開:東山保育園
12月1日(火)	保幼小連携	公開授業・保育、カンファレンス	公開:朝来幼稚園 朝来小学校
12月2日(水)	幼児教育実践のための 調査研究	公開保育 研究発表・研究協議・講評	公開:舞鶴幼稚園
2月20日(土) 午後	報告会	園…報告 講師…講評、講演	

5月23日(土)

記念講演「幼児教育・保育とは」(講師 神戸大学大学院 北野幸子准教授)
 第1回幼児教育ビジョン(仮称)策定懇話会 が開催されました。

平成27年5月23日(土)、舞鶴の幼児教育ビジョン(仮称)策定に向けて、記念講演と第1回懇話会が中総合会館コミュニティホールにおいて開催されました。記念講演には、多くの保育園・幼稚園・小中学校関係者約120名が参加し、神戸大学大学院准教授北野幸子先生から「幼児教育・保育」の基礎となる「乳幼児期の発達」や「教育・保育の考え方」、また「遊びや体験を通じて学ぶ」こと等乳幼児期に大切にしたい保育についてお話を聞きました。

記念講演後には、第1回策定懇話会も開催され、懇話会員による意見交換がなされました。また、記念講演と懇話会には、保育園・幼稚園・小中学校の先生方から構成されます作業部会の皆さんもご参加いただき、今後の議論を進めていく上で大変貴重な機会となりました。

よりよい舞鶴版の幼児教育ビジョン(仮称)を策定するために、多くの方に関わっていただき、関係者の皆様のご協力をお願いいたします。

記念講演「幼児教育・保育とは」

0～8歳の時期は、体験、経験的に学ぶ時期。
 子どもは耳からは学ばない、体験から学ぶ。体験を伴わない言葉だけからは学ばない。
 9歳以降は、概念的に学ぶ時期。(文字等を通して学ぶ)



<乳幼児期の保育の基本>

◎0歳の愛着が、その後の他者への思いやりや規範意識(ルールや約束を守ろうとする気持ち)の基礎となる。

◎子どもの育ちの根幹は、基本的信頼感である。温かいまなざし(関心)と過度でない期待が必要である。

◎0～8歳の時期は、体験、経験的に学ぶ時期。9歳以降は、概念的に学ぶ時期(文字等を通して学ぶ)。

◎だからこそ、気持ちや意欲に基づいた体験が必要である。それは、まさに遊びの中にあり、遊びながら学ぶことである。

◎意欲的な活動や体験にするためには、子どもの興味・関心を起点にすることが重要である。主体性を尊重することにもつながる。

てでいう「しつけ」は、自立するために、自分で判断できるように援助することである。

しつける人としつけられる人の相互の信頼関係が基本にあり、子どもの自己肯定感につながる関わり方(褒め方、叱り方等)が必要である。

◎子どもの規範意識、また、人権意識を育てるには、モデルとなる保育者自身の規範意識や子どもに対する人権意識が重要である。

◎子どもは耳からは学ばない、体験から学ぶ。体験を伴わない言葉だけからは学ばない。体験の差は、言葉の差でもある。特に2～3歳頃には、気持ちを表す言葉を獲得する時期である。

<乳幼児期の学びに向かう力を

はぐくむ保育>

◎「おもしろい」「なんでだろう」「やってみよう」と思う気持ちと、わかることができるのが楽しい、うれしいと感じる気持ちを育てることが学びに向かう力を育てる。

◎これからの教育は、暗記型・記憶重視・結果主義から、活用型・展開重視・文脈主義へと転換している。※1

◎遊びの中で「自分で考える」「自分で決める」「自分で行動する」こと。

◎「幼児期の遊びと学び」から児童期の学びへつなげるためには、保育者も学習指導要領をしっかりと見ておく。

◎与えられた体験ではなく、自らやりたい体験へ…例：体操・水泳・サッカー等の特

別な指導よりも、日々の遊びの中で個々が興味のある遊びを十分に楽しむ方が幼児期に必要な運動面の発達が促される。

※2

- ◎乳幼児期の今を大切にするために
- ・自己主張が認められているか?
 - ・主体性が発揮されているか?
 - ・指示・命令を浴び続けていないか?
 - ・お稽古ごとに追い立てられていないか?
 - ・子どもとその周りの大人が幸せか?

※1 OECD(経済協力開発機構)は、欧米諸国、アメリカ、日本などを含む約30か国の加盟国によって構成されており、世界中の人々の経済や社会福祉の向上に向けた政策を推進するために活動を行っている国際機関。OECDでは、各国の教育改革の推進と教育水準の向上にむけて、次世代を生きるための3つのキーコンピテンシー(主要能力)について提言している。

- ①自律的に活動する能力(個人の自律性と主体性)
- ②異質な集団で交流する能力(自己と他者との相互関係)
- ③相互作用的に道具を用いる能力(個人と社会との相互関係)



<乳幼児期の社会性をはぐくむ保育>

◎自我、自己中心性「自分が」「自分で」→他者への意識・共感へと発達していく。

◎自己の確立、人への信頼感(愛着関係)が基礎となり、自己肯定感が形成される。好きな友達と好きな遊びに没頭することが、他者への関心となる。また、他者への思いやりや協同体験から共同性が生まれ、集団への意識ができるようになる。集団の中での役割があり、役立つ喜びを感じる(自己有用感)が規範意識を育み、その後の「市民性」の教育につながる。

◎しつけの語源は、しつけ糸。裁縫でいう「しつけ」は、「ちゃんとまっすぐに縫えるように、「あらかじめ目安になるような縫い取り」をしておくこと」である。子育

※2 参考資料
『幼児期運動指針』文部科学省（平成24年3月）より抜粋

幼児期は、生涯にわたる運動全般の基本的な動きを身に付けやすく、体を動かす遊びを通して、動きが多様に獲得されるとともに、動きを繰り返し実施することによって動きの洗練化も図られていく。また、意欲をもって積極的に周囲の環境に関わることで、心と体が相互に密接に関連し合いながら、社会性の発達や認知的な発達が促され、総合的に発達していく時期である。

また、遊びとしての運動は、大人が一方的に幼児にさせるのではなく、幼児が自分たちの興味や関心に基づいて進んで行うことが大切であるため、幼児が自分たちで考え工夫し挑戦できるような指導が求められる。なお、幼児にとって体を動かすことは遊びが中心となるが、散歩や手伝いなど生活の中での様々な動きを含めてとらえておくことが大切である。

(1) 多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること

幼児が自発的に様々な遊びを体験し、幅広い動きを獲得できるようにする必要があり。幼児にとっての遊びは、特定のスポーツ(運動)のみを続けるよりも、動きの多様性があり、運動を調整する能力を身に付けやすくなる。幼児期には体を動かす遊びなどを通して多様な動きを十分に経験しておくことが大切である。

(2) 楽しく体を動かす時間を確保すること

文部科学省調査では、外遊びの時間が多い幼児ほど体力が高い傾向にあるが、4割を超える幼児の外遊びをする時間が一日1時間(60分)未満であることから、多くの幼児が体を動かす実現可能な時間として「毎日、合計60分以上」を目安として示すこととした。幼児にとって、幼稚園や保育所などでの保育がない日でも体を動かすことが必要であることから、保

育者だけでなく保護者も共に体を動かす時間の確保が望まれる。

(3) 発達の特性に合った遊びを提供すること

幼児は、一般的に、その時期に発達していく身体の諸機能をいっばいに使って動かそうとする。そのため、発達の特性に合った遊びをすることは、その機能を無理なく十分に使うことによってさらに発達が促進され、自然に動きを獲得することができ、けがの予防にもつながるものである。また、幼児の身体諸機能を十分に動かし活動意欲を満足させることは、幼児の有能感を育むことにもなり、体を使った遊びに意欲的に取り組むことにも結び付く。

したがって、幼児期の運動は、体に過剰な負担が生じることのない遊びを中心に展開される必要がある。発達の特性に合った遊びを提供することは、自発的に体を動かして遊ぶ幼児を育成することになり、結果として無理なく基本的な動きを身に付けることになる。



第1回 懇話会

◎ビジョンの意義：公立私立、校種の違いを超えて、支援の必要な子どもの教育・保育、地域や家庭での教育すべてを含めた教育・保育に対するビジョンをいっしょにつくる。

◎次世代を育成する専門職として、保育園・幼稚園・小学校・中学校のそれぞれ

の先生が互いに尊敬や敬意を持ちつつ、それぞれの持つ専門性の違いを超えて、お互いの独自性を尊重しつつ、育てたい子ども像の共有を図っていく。

◎子どもの自尊感情(自己肯定感)を育て、個々の個性を伸ばすには、主体性の尊重をした教育・保育が重要である。

◎幼児教育：保育のあり方・方法を保育所保育指針や幼稚園教育要領との整合性を図りながら、「生活と遊びを中心に」「主体性の尊重」「発達」「環境を通じた教育・保育」…をキーワードにしていきたい。

◎「設定保育」「自由保育」どちらか一方がよいのではない。好きな遊びの時間(自由遊び)の中に、少人数の小規模の設定保育が同時進行でおこなっているととらえる。子どもの主体性は尊重するが、やはり5領域の内容との関係、育てたい子ども像、子どもにつけさせたい知識や技術、そして環境をどう設定するか、保育者がどんな言葉かけをするのか等の教育的意図(ねらい)を持って関わるのが大事である。主体性を尊重するといって放っておくのではなく、保育者の指示・命令ばかりの一斉型の保育でもない。

◎保幼小中の先生が、それぞれの課題を認識し、0~15歳を見通し、育ちをつなげるために接続期教育、保幼小中の連携は重要。

◎子どもの育ちの連続性を考えた時に、家庭・地域との連続性も重要になってくる。

◎保育園・幼稚園は、家庭の教育機能をいかにサポートするために、支援するのではなくサポートし、いっしょに子育てをするパートナーにしていくことが大事。幼児教育・保育の専門職として啓発し、子育ての当事者である保護者を巻き込んでいく。



懇話会委員名簿

所属	役職等	氏名
神戸大学大学院人間発達環境学研究所	准教授	北野 幸子(会長)
兵庫教育大学大学院学校教育研究科	教授	藤澤 利成(副会長)
熊本市私立幼稚園協会	会長	松嶋 康晴
熊本市民間保育園連盟	会長	森 宏昭
熊神幼稚園	園長	藤 政也
西乳児保育所	所長	西嶋 明美
熊本市小学校長会		大久保 智子
熊本市中学校長会	会長	阿部 秀純
熊本市教育委員会	委員	小澤木 良利
熊本市PTA連絡協議会	副会長	有本 弓美
熊本市PTA連絡協議会	母体副委員長	廣藤 久美子
熊本市民生児童委員連盟	副会長	山田 美子
熊神子ども育成支援協会	会長	角巻 幸弘
あいつる子育てサークル連絡会		大滝 みと
公募		嶋田 知子
公募		藤村 文美

今後の日程

<懇話会>

- 第1回 5月23日(土)
- 第2回 7月13日(月)
- 第3回 8月20日(木)
- 第4回 10月15日(木)

<作業部会>

- 第1回 5月26日(火)
- 第2回 6月23日(火)
- 第3回 7月 6日(月)
- 第4回 8月 5日(水)
- 第5回 9月 3日(木)



幼児教育・保育の質の向上研修ニュース

発行日 平成27年9月30日
 発行者 舞鶴市教育委員会
 舞鶴市健康・子ども部

6月18日 中保育所 公開保育を実施しました
 日本保育学会 課題研究委員会の視察も受けました

今年度、最初の公開保育を中保育所で実施し、神戸大学大学院准教授北野幸子先生にご指導いただきました。保育園・幼稚園・小学校から50名の参加がありました。北野先生のご指導を受けての公開も3年目を迎え、保育者が、子どもを主体とした保育を展開しようとしている様子やそのための環境、子どもとの関わりを見ていただきました。まだまだ、学びの途中ですが、少しずつ変化してきています。

また、日本保育学会課題研究委員会より、「市が研究者と連携して研修の機会を提供し、保育の質の向上を目指し、公私の枠を超えて園同士が学び合うことは同僚性の拡大でもあり、今後の質の向上に向けた取り組みのモデルになりうると考えており、研修事業を視察し、実施方法、効果、課題等を研究する」ことを目的として、委員6名が視察に来られました。

公開保育を見学していただき、カンファレンスにも貴重なご意見をいただき、いつも以上に学びが多かったのではないのでしょうか。

参加園/校

永福保育園	朝来幼稚園
岡田保育園	倉梯幼稚園
さくら保育園	橋幼稚園
相愛保育園	舞鶴幼稚園
平保育園	
タンポポハウス	吉原小学校
なかつ保育園	
東山保育園	
ルンビニ保育園	
八雲保育園	
やまもも保育園	
うみべのもり保育所	
中保育所	
西乳児保育所	

年齢に応じた関わりや環境に工夫が見られた。

日案における「評価の観点」をより具体的に書くことで援助の方法も見えてくる。

～北野先生のコメントより～

<畑プロジェクト>

昨年から続いている畑プロジェクト…今年は5歳児だけでなく4歳、3歳児の子どもたちも西川さんや萩野さん（地域の支援者の方）から、野菜作りを教えてもらっています。

自分たちから、西川さんを見つけると聞きたかったことを聞きに行き、話しかける様子が日々、つながっている様子が見られました。

また、4歳児がどろだんごづくりから、西川さんの畑の斜面にある赤土に気付き、おだんごづくりに発展している様子も見られました。子どもたちは、赤土の特徴を感じながら、「落としても割れない」ことを試したり、「なぜ、こわれないか？」を考えようとする姿も見られました。



<砂場>

砂場では、5歳児がといやシートを使って水を流し、ためようと数人がかたまつて遊んでいました。といの角度や高さ、

つなげ方を工夫し合い、話し合う姿が見られま



した。そのあと…5歳児（黄色帽子）の様子を見ていたのか、3歳児（青帽子）が同じように水を流したり、スコップを持って砂場で遊ぶ様子が見られました。

2歳児の砂場遊びでは、保育士が見本になって道具を使って山づくりをしたり、泥の感触を手で確かめたり、いっしょに楽しむ姿がありました。



<環境の工夫>

北野先生より…

◎全体的な広さと人数規模とが合っている。

◎広すぎても遊びはつながらない。色水遊びの場所や道具の配置等もよかった。机があることで子ども同士が見える、つながりやすい。

◎図鑑を見る場所

が大型玩具の下で落ち着き、ちょうどよい空間になっていた。



<振り返り>

北野先生より…

◎振り返りの場所や内容は保育士のねらいや意図が大事。何を伝えるか？何を広げるのか？

◎3歳児は、部屋に狭ってからではなく、その場面に近い場所でする方がリアリティーがあり、わかりやすい。戸外で臨場感があった。

◎4、5歳児は、室内など、集中して聞ける環境の方がよい。

◎4歳児は話がよく聞けており、集中力があつた。

◎どの場所でするかいろいろ試してみるとよい。



公開保育カンファレンス

子どもの姿が評価基準である

～北野先生カンファレンスより～



＜北野先生より＞

◎保育者が保育を語るようになったことが大きく変化した点である。

＜環境＞

◎ねらいを達成するための環境とは？遊びと遊びが繋がっていく距離になっていること、動線が確保されていること、異年齢児が交流できること（5歳児がモデル）である。3歳児が5歳児とよく交わっていた。

◎比べたり、調べたりができていた。

＜各年齢＞

◎2歳児の読み聞かせは、よく見ており、先生大好き！の雰囲気があった。

◎2歳児は、感情の伴った体験と同時に言葉を習得する。その時に保育者が同じ感情になり、体験と言葉をセットで話す。保育者の言葉の量が子どもの語彙数を左右する。

◎3歳児の「見てて、見てて」の感情の共有がなければ次へ進めない。具体物・場面でつなぐ。

4、5歳児は想像させながら、つなぐ。

◎子どもの姿が評価基準である。

ドキュメンテーションや公開のための見せるための保育になってはならない。子どもの一番輝いている場面を切り取り、選択していくことが保育の専門性でもある。一人ひとりの子どもが何をしがっているのか？どんな興味があるのか？丁寧に見ていく必要がある。

～日本保育学会 課題研究委員会委員より～



◎保育者の意図性が強いと子どもの主体性（思い）が出にくくなってしまいます。逆に意図性が弱いと環境が乏しくなってしまいます。バランスが難しい。

◎保育士が息をのみ、注意したい気持ちを抑える姿があり、意図を減らす努力をされていた。

◎ドキュメンテーションや公開のための見せるための保育になってはならない。また、写真を並べるだけでなく、子どもの活動だけが、重視されるものでもない。

◎遊びの発展と流れを保育者がどのようにとらえているかが大切。

◎発達や遊びの見通しがあれば、穏やかに関われる。そのことを家庭にももっと発信

してほしい。

◎プロジェクトがどう生まれていくのか？テーマはだれが選ぶのか？気づきをしながら続けていくのはだれなのか？日常生活の中から出てくるものをどう選んでテーマ（プロジェクト）にしていくかをしっかりと保育者が持っていなければならない。

◎ドキュメンテーションでは、何もかも入れ込むのではなく、子どもの一番輝いている場面をどのように切り取り、選んでいくか、それが、保育の専門性であると同時に保護者に伝えていくための工夫になる。

◎道具を使いやすいように、出しやすいように、しまいやすいようにすることはわかりやすく保育をすることにつながる。

◎発達年齢に合わせた環境づくりが必要。

◎ドキュメンテーションは、子どもが遊びを味わい直すことにつながり、場面を変えて振り返ることになる。

◎一人ひとりの子どもが何をしがっているのか？どんな興味があるのか？丁寧に見ていく必要がある。遊びを見つけていく子にどう関わっていくのかも課題。

◎遊びと生活（意図性が強いもの）は子どもの育ちの両輪でないといけない。生活習慣を主体的に身につけていくことも大事である。

ドキュメンテーション研修

保育者が主体的に研修に参加し、保育を語り合うことが質の向上につながる！園内だけでなく、園の枠を超えて学び合うことが大事！



参加者の皆さんに掲示してあるドキュメンテーションを見て、感じたことを付箋に書いて貼ってもらい、北野先生に指導いただく形で研修を実施しました。カンファレンスが長引いたこともあり、付箋はたくさんは貼れませんでした。先生同士が保育やドキュメンテーションについて語り合う姿も見られ、少しずつですが、参加者自身が主体的に参加する雰囲気ができてきました。

初めて書かれた先生、悩みながら書いている先生…それぞれ迷い悩みながら保育をすすめておられることもわかり、参加者自身が研修を通じて他の参加者からも学ぶ機会になってきています。

北野先生からも、自分たちでドキュメンテーションや保育を見合いながら、保育を語り合うことが質の向上につながることも助言もいただいております。今後も参加者自身が考え、学べる研修にしていきたいと思っております。

日本保育学会 課題研究委員会委員より

「舞鶴にもこうして幸せな子どもたちがいることがわかり、うれしく感じた。保育の質の向上研修事業をされる中で、子どもを主体とした保育が広がっていくことを期待したい。このように、公私や園理の枠を超えて学び合う公開保育や研修が、広がっていくように舞鶴からもどんどん発信してほしい。」との感想をいただきました。次回、課題研究委員会委員視察にかかわる公開保育は、11月11日（水）東山保育園で実施します。



幼児教育・保育の質の向上研修ニュース

平成27年度 第4号

発行日 平成27年9月30日
 発行者 舞鶴市教育委員会
 舞鶴市健康・子ども部

7月2日(木) 岡田小学校・岡田保育園 公開授業・保育を実施しました

保幼小連携活動について学ぶため、岡田小学校と岡田保育園の公開授業・保育を実施し、鳴門教育大学大学院教授木下光二先生にご指導いただきました。

保育園・幼稚園・小学校から約30名の参加がありました。また中丹地域での保幼小連携推進を図っておられる中丹教育局からも指導主事が視察に来られました。

岡田小学校・岡田保育園は、木下先生のご指導を受けて連携活動の公開を行うのが、今回で3度目となるため、変化してきた点なども含め、連携活動だけでなくその基となる日々の教育・保育にも関わる様々な事柄について、ご指導・ご助言いただきました。

<公開授業・保育> 場所:岡田保育園 ~生活科学学習指導案より~
 9:00- 9:30 岡田保育園見学 【学 年】小学校第1学年:10名
 9:30-10:30 連携活動 公開授業・保育 保育園 年長児:21名
 10:45-12:00 カンファレンス 【単元名】なつだあそぼう



【本時の目標】 1年生:○水や泡を使って楽しく遊べることや遊びを工夫する面白さに気付くことができる(気付き)
 ○水や泡を使った遊びを工夫することができる(思考・表現)
 ○泡遊び・色水遊びに関心を持ち、みんなで楽しく遊ぼうとすることができる(関心・意欲・態度)
 年長児:○友達や1年生と、色水の変化やシャボン玉の美しさ、不思議さを感じている



参加園/校	
岡田保育園	朝来幼稚園
さくら保育園	倉梯幼稚園
平保育園	三輪幼稚園
タンポポハウス	
東山保育園	
ルンビニ保育園	朝来小学校
八雲保育園	岡田小学校
やまもも保育園	高野小学校
うみへのもり保育所	由良川小学校
中保育所	校
西乳児保育所	吉原小学校



環境に子どもが自ら働きかけることが大切 停滞時には、先生が楽しんでモデルを見せる
 連携から(教育課程・カリキュラムをつなぐ)接続へ ~木下先生カンファレンスより~

<朝の自由遊び>
 ◎コーナーが点在しており、いろんな場所にはばらけて好きなところで遊んでいて、とてもよかった。
 ◎遊びこむこと、遊びたくなる環境を常に意識されている。いい声、いい表情がいろんな場所にあった。
 ◎子どもがたくさん遊んでいるのは先生が変わったから。
 ◎小学校が来たときに、以前は3・4歳児を部屋に引き上げさせていたが、今回はそのまま遊んでいたのが良かった。



<環境を通じた遊び>
 <シャボン玉遊び~>
 シャボン玉液に赤土を混ぜる子や小学生が持ってきた道具(ハンガーに巾着を巻いたもの)や木に毛糸をくっつけた道具でシャボン玉遊びをしていた。
 【木下先生】
 ◎単なるシャボン玉遊びではなく、液に赤土を混ぜている子がいるのも面白い。先生がそれとめずに見ているのが良い。シャボン玉と何かを混ぜて遊べる環境になっている。なんで入れているのかその子に聞いてみたい。担任が次につなげる(ex.色んなものを入れてみる)。
 ◎準備しすぎでなくてよかった。(毛糸の長さ、自分で糸を切る、くぐるなど)

<色水遊び>
 花びらや葉で色水あそびをしている。
 【木下先生】
 ◎以前は先生が花びらを摘んでカップなどに用意してあったが、今回は子ども達が自分で花を摘みに行くことが出来るように環境が設定されていた。
 ◎環境に子どもが自ら働きかけることが大切。教材同士の関わりの中で育っている。



<導入>
 朝遊びの途中で小学生が到着し、5歳児と小学生が集まり教師や児童からの話をきく
 【木下先生】
 ◎静かな集まり方が良い。集まっている一方で遊びが続いており、大きな声もない。
 ◎無理に集めるのではなく、他にやりたい遊びがあっても、みんなが(楽しそうで)気になってシャボン玉に集まるという。
 ◎前の活動(泥んこ)の時にあった気づきを伝えたり、どんなシャボン玉を作りたいか尋ねたり、「楽しみにしている」「発見を教えてください」など子どもに聞いたりすると良かった。
 <振り返り>
 5歳児と小学生と一緒にサークルを作り今日の遊びについて振り返る場面
 【木下先生】
 ◎振り返りが良かった。小学生の話す姿が年

<連携活動について>
 長児のイメージになって良かった。担任が子どもに「何が楽しかった?」など問いかけをして良かった。
 ◎担当を決めていたようだが、1年生の担任も振り返りに参加し、今日一番の学びを子に伝える場面があれば良かった。両者で子ども達を見取り、次にどうつなげるか?導入・まとめ共に両者で行った方が良い。
 <連携全般>
 ◎朝の遊びのイキイキ感が小学生が来て停滞してしまっ。子どもの声小さくなった。
 ◎停滞している時には、先生が楽しんでモデルを見せる。これを使うと遊びがどうなるか?
 ◎シャボン玉のひもを長くしすぎてやりにくい子の援助なども必要。
 ◎担任一人に求めるのは難しい。周りがどれだけサポートするか。
 ◎単元をどうつくるか、何を体験させようとしているのか、ねらいをどう達成するかがぼやけていた。生活科=探求 明確なめあてが生活科には必要。
 ◎同じシャボン玉遊びでも校庭といろいろなものがある保幼の環境の中でするのででは違う。
 ◎先生が子どもにさせたいことがあっていいが、子どものやりたいことと違うとダメ。させたいこと、やりたいことが一致するように上手に持っていく。(その素材)があるから遊んでいる。先生はそのため前に出ないといけなときは出ていい(停滞時のモデル等)
 ◎課題のない活動はない。見つけた課題をクリアしていく。遊びと学び、保育と教育、違いはある。吟味しながら進めていく。
 ◎この研修事業に教育委員会や幼稚園も入ってできるようになったのはとてもいいこと。連携から(教育課程・カリキュラムをつなぐ)接続へと進み、ぜひ接続カリキュラムを作ってほしい。

学校と保育園の違いはあるが、その中でお互い大切にしたいことを話し合っている
協力しないといけないような仕掛け 活動後の先生同士の振り返り

〈意見交換〉

Q1. 今日活動までどんな経験をしてきた？
動機づけ・今日の活動の理由は何？

A. (年長担任より) 去年からの朝遊びでじっくり好きな遊びをする時間を取り入れてきた。そのことで満足して次の活動に移ることが出来るようになった。泥んこ、色水、石鹸・泡あそび等の活動の中で一番好きな遊びが泡あそびだった。さらにシャボン玉遊びに発展していった。一年生も去年経験している遊びでもあり、普段の遊びと関連付けられたらと設定した。

(小学校担任より) 他の学年のシャボン玉遊びをみて、手洗い石鹸・ストローから始まった。小さいシャボン玉が出来た喜びから大きいものを作りたいという意欲に。

Q2. 今日活動の中の学びは何？

A. 以前は個々に遊んでおり、声をかけると混じり合う、大人の関わりがないと混じり合わないという状況であった。自然物がたくさんあっても関わる力がなかったので、関わるように仕掛けていった。

今回は1年生の気付きが遊びの中に入れてほしいなど。(1年生の持ち込みの)道具の量を多くせず、貸しあいができるようにした。

道具を変えると違う形になることがわかるようにした。年長はものを組み合わせるといろんな形になるなどに気付いていた。

小学生は活動の中ではいろいろなつぶやいてても振り返りで言えなかったのが、言えるように

なった。教えてと言うと入り込みやすくなるので、そこを進めたい。

Q3. 環境設定で気づいたことは？

A. 道具の数を多く置かない。木の棒と毛糸は年長と小学生が一緒にするために置いた。また、ハンガーも作るのが難しく協力してつくることを期待した。

Q4. 今回の活動をとおしてお互いに得はあった？(互恵性)

A. (小学校担任より) 違う場に来たことがまず第一歩。

(年長担任より) 初めて使うハンガーでもできるという発見があった。

「手伝って」が最初は出来なかったけれど最後は協力する姿もあった。1年生の姿を見て「何が違う？」と気付き、どこが違うのか考えてやっていた。それによって出来た喜びを味わった。また年長児の姿(見本通りに作らなくても出来る)から1年生も気付くことがあった。

今年是指導計画を小学校と保育園と一緒に作ることができた。学校と保育園の違いはあるが、その中でお互い大切にしたいことを話し合っている。

〈会場の意見より〉

◎〈小・教諭〉保小連携で朝顔の種と一緒に植え観察している。手触り「がさがさ、ふわふわ」等感じる

がそれを周りに伝えたり広げられていない。保育園の先生から教えてもらい、1人ずつ土を用意しておくのではなく、協力して運ばないといけないように仕掛けをしている。仕掛けによって関わりが変わる。

◎〈保育士〉課題に気付けたときは、先生同士で意識的に一年かけてやっていこうと話している。互恵性について、活動後必ず振り返るようになっている。今日はお互いにお得があったのか？と考えている。

◎〈教育委員会〉年間を通してお互いに成長し合える機会があることで、先生も成長する機会になっている。なぜ関わりが必要か。自分が感動したり発見したこと、興味・関心それを子どもは伝えたい。一人ではできないダイナミックな活動ができ、知恵を出し合う。色水遊びでは化学変化が起こっていた。環境がすごく大事。花を摘んでいるのも、学校では怒られるが、園では大事な環境。先生がどういう声かけをしていくか、子どもの主体性を引き出すための、その場その場に合わせた声かけについて、先生方にはいっぱい学んでほしい。



カンファレンスの中でも「環境設定が大事」との発言がありました。保幼小連携にも日々の教育・保育にも関わる環境について、各園の取り組みや木下先生からお聞きしたお話を紹介します。

～環境のヒント～

〈保育園〉～子ども主体の保育を通して～

◎年少児は年長・年中児の遊びを見て、これしたいというのが育つ。年長・年中児に「ある程度枯れてきた園庭の花はとっていいよ」と何度か伝えと、年少児もそれを見て、年長・年中児に「これとっていい？」と聞きに行く。

◎ポリタンクいっぱい水を入れてしまうと子どもが運べない。空で置いておくと子どもが持って行って水を入れ、他の子に「一緒に持って一」と言って協力して運び満足した様子がある。

◎子どもが生き生きしてきた。遊びに夢中。保育士の考え方が変わり、枠が広がってきた。クッキングはクッキングの日だけと思っていたが、いもがとれた時とか、いつでもいいと思えるようになった。

◎子どもも自己発揮が大事だが、保育士も同じ。子どもの良いところが見えるようになり、自分で考え、自己肯定感が上がって、先生も伸びてきた。園全体の風紀も変わってきた。

◎連携も環境もねらいが大事。ねらいがはっきりしているから、環境も整えられる。異年齢は空間を共有するだけでなく、関わりを持たせる。どんな子を育てたいかがはっきりしている。自分で持ってきてする子になってほしいから、テーブルの上に何も無い。小と保・幼の先生は、1つねらいを決めてそれに向かって話す話しやすい。具体的なことも出てくるようになる。

〈木下先生〉

◎鳴門教育大学附属幼稚園の色水遊びはテーブルの上に何も無い。道具も材料も子どもが調達してこないといけない。並べておくとそれでしか遊ばない。保育者が置いたものか、子が置いたものか重要。

◎入園すぐなど、どこに何があるか分からない時は、置いてもいい。低い水として置くときがあってもいい。時期・年齢もある。でしゃばりすぎても、引っ込み過ぎてもよくない。

◎「咲いたばかりの花は取らないでね。萎れたようなのはいいよ。」と言っておくと、聞きこなくとも自分で取る。取ってはいけない花があってもいいが、取っていいものもある。事前の約束で入園の時に話しておく。「ただ公園のは取らないでね。幼稚園のはそのためにあるんだからいいんだよ。」と言ってあげる。自然は最高の素材。自然の素材で遊べる子に。

◎その季節の自然物や生き物が室内にあるとよい。子どもがしたい時にしたい物が取れるようにする。

◎朝、「これがしたい」と思って子どもが来ているか。前の日にそう思わせて帰らせているか。家から何かを持ってきたり、「今日は〇〇するんだ！」と言っているか。前の日に保育士がきつとあの子は明日こうするなとわかっていること。

◎シャボン玉でも、液だけで遊んでしまうところを素材と素材とを混ぜる姿があった。先生の許容範囲が広がったからできるようになったもの。

◎鳴門の園では、時間的な束縛を子どもにも与えない。おやつ時間も自分で決める。ウサギ当番も朝子どもがやりたいことをやって落ち着いたら集まってきている。中には遊びに夢中になる子もいるが、それはそれでいい。ごめんね、明日は行くな。でよい。

◎遊びと遊びが見える環境が大事。じっくり遊ぶところ、体を動かすところは分けるとよい。

◎子どもとつくる保育を。(全国のいろんな園を見る中で)じょうろに「花用」と「砂場用」があり、泥が入ると詰まるので分けているという所があった。しかし泥が入って詰まることで、なぜ詰まるのか考える。その機会を奪ってしまっている。

◎雨の日に園庭に出ないところがあるが、雨の日にしか経験できないことがある。親には、雨の中でこんな素敵な発見をしたと記録で見せてあげる。

◎朝は、一番心が解放されて、遊びにいい時間。鳴門は、7～8割が自由保育、2～3割が設定保育(みんなで踊る、運動会の練習等)。自由保育は魂の自由で、解放されている状態であり、なんでもどうぞではない。

◎環境にだけ目が奪われがちだが、意図の方が大事。

◎遊びの中の発見、成長、学び、何が育ったかを記録し、一人ひとりの遊びを見つめて広げること。

◎先生は遊びが停滞したら入り、充実したら離れる。子ども同士で遊べる子をつくる。

幼児教育・保育の質の向上研修ニュース

発行日 平成27年12月1日
 発行者 舞鶴市教育委員会
 舞鶴市健康・子ども部

7月13日（午後） 永福保育園において公開保育を実施しました

神戸大学大学院准教授北野幸子先生をお迎えし、永福保育園にて公開保育を実施しました。公開保育は初めてということもあり、遊びの環境や保育者の関わりなどを具体的にご指導いただきました。

永福保育園の園舎は、気持ちの良い風が通り抜け、青々とした稻が波のように揺れ動くさまが一望でき、自然を身近に感じられる環境にあります。このような環境の下、幼児の保育を中心に公開していただきました。“普段の保育を見てほしい”との思いから、各クラスの子どもたちの好きな遊びが準備され、それぞれ遊びに向かう姿が見られました。

遊戯室には、ドキュメンテーションがたくさん展示されており、子どもたちが何に興味を持ち、そこで何を感じていたのかが、見やすく書かれていました。

北野先生からは、それぞれの遊びや環境について、より具体的なアドバイスもあり、参加の皆さんにとっても、参考になることの多い公開保育カンファレンスとなりました。



参加園

- | | |
|-----------|-------|
| 永福保育園 | 池内幼稚園 |
| 岡田保育園 | 三鶴幼稚園 |
| さくら保育園 | |
| 平保育園 | |
| タンポポハウス | |
| なかずじ保育園 | |
| 東山保育園 | |
| ルビニ保育園 | |
| 八雲保育園 | |
| やまもも保育園 | |
| うみべのもり保育所 | |
| 中保育所 | |
| 西乳児保育所 | |

与えられたものではなく、子どもが思考し、遊びをつくりだせるような環境づくりを！
 ～北野先生コメントより～



<どろんこ遊び・砂遊び>

泥を全身で感じている子、指先で泥に表現する子、一緒に川を作る子、思い思いに活動する様子が見られました。

【北野先生より】

◎どろんこ遊び楽しそうだった。あの空間が砂場まで広がると、遊びがよりダイナミックに

なっていく。

◎砂だけでは型がとれない。水が入ることで、ごっこ遊びが広がり、砂や土の性質への気づきが生まれたり、試したり、比べたり、学びにつながる。

◎大きなスコップやくままでがあると、協同して大きなものが作られるようになる。全身運動にもなり、体づくりにもつながる。

◎タライがあると、そこに集まりコミュニケーションや対話が生まれる。子どもたちの相互作用を促すことになる。

◎どろんこ遊びがどう展開していくのか、子どもの発想や気づき、試す様子を先生も一緒に楽しんでほしい。



<しゃぼん玉>

大変風が強かったこの日、しゃぼん玉が風に吹かれる様子を言葉で表現し合い、経験から、風によってしゃぼん玉の動き方や飛んでいき方が違うということに、気が付いている様子が見られました。

【北野先生より】

◎先生が教材研究したことを、次は子どもたちが自分で考え試していけるとよい。そのための道具や教材を準備する。

(石鹸、網、おたま、はちみつ、針金など)

◎“洗濯ごっこなどに発展していくかも！”など遊びを見越してタライ等、環境設定をする。

◎机があるのはとてもいい。シャボン玉の容器がたくさんあると、それぞれが試し、それを他者へ発信できる。子どもたちがしている遊びを家庭に発信し、容器や用具を持ってきてもらうなど、協力を得るものいいのでは？ないか。



<園庭の環境・竹馬>

目標をもち、竹馬をずっと練習していた数人の5歳児。発達に応じた遊びが自信や達成感につながっている様子が見えました。

【北野先生よりアドバイス】

◎竹馬をする場所が、周りから見えるところにあると、慣れの気持ちや達成感が生まれる。教えてあげるような姿が出てくるのではないか。

◎動線がループになると走り回れる。子ども達が相談し合い、鬼ごっこなどのゲーム遊びが始まるとよい。

◎地面は、フラットより起伏のあるほうが運動能力が高くなる。

◎竹馬を発表するなど、集団の場で認めてもらえるとうちの自信につながる。



<3歳児 室内遊び>

自動車遊びから発展した道路づくり。坂道から何度も発車をし、どれくらいの勾配がよいのかを試す姿が見られました。今後、立体的なものになるのか、道路と共に街が作られていくのか、遊びの展開が楽しみです。

【北野先生よりアドバイス】

◎子どもたちの好きな自動車遊びを発展させようという視点が大事。子どもたちから思いやイメージを引き出し、一緒に試行錯誤しながら道路や坂道、作っていくと、もっと遊びが広がるのではないかと、子どもが思考し、遊びをつくりだせるような環境づくりを心がける。(様々な素材を自由に取り出せることも大事)

◎ままごとコーナーが、固定で設定されると遊びが継続される。生活感を出す工夫をすることで、その場らしいセリフ、人間関係が生まれ、イメージ、模倣の能力がつく。(キッチン、エプロン、食器、食材等)

◎子どもの“〇〇したい”という主体性を大切にする。



公開保育にチャレンジすることが大事！

「公開保育に後悔なし、効果あり！」

～北野先生カンファレンスより～



【保育者の関わり】

- ◎保育者が子どもと一緒に試行錯誤を楽しむ。子どもの「〇〇したい」「もっと〇〇したい」というアグレッシブさを大切に、もっと自分を出してほしいという視線で関わる。
- ◎保育者が子ども同士をつなぐことを意識して声をかける。

- ◎小集団やクラスで話し合いの場を設け、それぞれの遊びや発見、学びを共有することが大事。あわせて、伝えたい、聞きたいという気持ちの育ちにもつながる。
- ◎素晴らしい風をぜひ活用してほしい。風が感じられる環境を意図してつくる。“強いつてどのくらい？どうしたらわかる？”科学的根拠から学びにつなげる。
- ◎パラレルトークが大事。子どもの行動、体験、感情を保育士が言葉にして投げかけ、遊びをつなげ、ふくらませる。

【その他】

- ◎自園でしかできない実践が、各園でされるとおもしろい。それが特色となる。
- ◎（公開）保育は、シナリオ通り、手順通りにならなくてもよい。「こうしなければならない」と無理やりさせるのではなく、

子どもが自分で選べる、決められることが大事。子どもの楽しさも全く違う。

◎保育者が「～しなければならない」をどれだけ取り外し、臨機応変に子どもと一緒に保育をつくっているかである。

◎ドキュメンテーションは、子どもの興味や発見、きっかけを書く。そこに関わる保育者の意図、ねらい、発達や5領域を交え、遊びの中での学びの息とりを保護者に発信する。保育士の専門性をアピールするツールにもなる。



環境を構成するということとは？

子どもの興味・関心を起点とした遊びの環境。子どもが選べる、準備できる子どもを主体とした環境。

～北野先生カンファレンスより～



◎子どもの興味・関心を起点とし、遊びたくなるような環境。

◎素材や道具を子ども自身で選べる、自分で準備できる子どもを主体的とした環境。

【自然】

- ～自然から豊かな感性や科学へ広げる～
- ◎風を感じる⇒風の向きがわかるもの（吹き流しなど）を置く⇒風の向き、強弱に気付く。そこから、科学としての風を体験していく。
- ◎土の種類⇒道具の下には、サラサラの土、陰になったところの温った土…園庭には、いろいろな土があることを知

る⇒種類や変化に気付き、比べる（晴れた日と雨の日の違いなど）

◎室内に自然（動植物）を取り入れる⇒毎日見て、変化を感じる「なんで？知りたい」⇒図鑑を見て、調べる「わかった、うれしい」⇒表現する（絵に描く、粘土でつくる）

【空間】

～遊びをつなげる、子どもをつなげる～

◎空間を制約すると個別の遊びになる。◎保育士が、それぞれの遊びがつながっていくというイメージを持ち、対話や協力、協同を誘うような環境づくりをする。

◎砂遊びとどろんこ遊びを近くにすると遊びがつながりやすい。

◎水の場所⇒どろんこ遊びや砂場の近いところにタライを置く⇒2～3人が固まって遊ぶ。

◎竹馬の位置（前ページ「園庭の環境、竹馬」に記載）

◎ままごとコーナー（前ページ「3歳児室内遊び」に記載）

◎図鑑などが常にあり、比べたり、整理したり、分類できるような探究コーナーがあるとよい。与えられる知識より、興味関心のあることを自分で調べられることが大事。

【教材・素材・道具】

～子どもの興味・関心を起点に

発達を考慮して～

◎子どもの気持ちや興味・関心を起点として、遊びを予測する。そうすれば、準備しておく教材が見えてくる。準備が無駄になってもよい。

◎砂場に大きめのスコップを置くと、ダイナミックな遊びになる。

◎砂、土、水等の自然物、積み木など低構造なものほど思

考力、想像力がつ

く。見立てやアレンジが生まれ、相談したり協力したり、やりとりにつながる。



第2回 幼児教育ビジョン策定懇話会 開催

しました。「意欲的、主体的、夢中になって遊びこむ、自分も友達も大切に」「自分で考え行動する、思いや意見を伝える、個性や違いを認める」「自己肯定感、自己有能感、自己有用感、愛着形成」等のキーワードが出されました。第2回作業部会では、育てたい子ども像について整理しながら、幼児教育・保育の実践の中でどのようなことを大切にしたいかを話し合いました。

第2回懇話会においては、作業部会での報告を受け、家庭や地域の役割を明確化す

ると共に、ふるさと舞鶴の良さを知る経験や保育所・幼稚園での遊びや体験の大切さや主体性を尊重した関わり的重要性について意見交換されました。

今後は、「保幼小中の連携」や「方向性」についても議論を進めます。



7月13日(月) 第2回 幼児教育ビジョン策定懇話会が開催されました。その懇話会に向けて作業部会を実施し、幼児教育ビジョン策定について議論を進めました。

第1回作業部会の中では、47名の保育所・幼稚園・小学校・中学校の先生から構成される作業部会メンバーが4つのグループに分かれて、現状や課題を出し合い、その上で乳幼児期にどのような子どもを育てたいかを議論

幼児教育・保育の質の向上研修ニュース

発行日 平成27年12月1日
 発行者 舞鶴市教育委員会
 舞鶴市健康・子ども部

8月21日（金） 保幼小連携研修会を行いました

小学校教育研究会生活科部と合同で、「保幼小連携研修会」を実施しました。昨年度より、午前に保育園・幼稚園の公開保育を行い、就学前の子どもたちの生活の様子を小学校の先生方に知ってもらい、午後は、保幼小が一緒に連携活動について話し合う場を設けました。保育を知る機会とし、そして、実際に連携活動を実施していただく計画作りに取り組みました。

今年度の公開保育は岡田保育園と舞鶴幼稚園にて行われました。

午後の研修会では木下先生の講義を受けた後、保幼小で1つのグループを作り、各校園の実態を知り、理解を深め、年間の連携活動計画を作成しました。

＜公開保育＞

岡田保育園 9時00分～10時00分

舞鶴幼稚園 10時30分～11時30分

＜研修会＞ 13時30分～16時30分

講演：「生活科を通した保幼小の連携について」

講師：鳴門教育大学大学院 教授 木下 光二氏

グループワーク：「生活科保幼小連携活動年間計画を作成してみよう」

保・幼・小がひとつのグループになり、それぞれの実情に合わせて生活科保幼小連携活動の年間指導計画をつくってみる。

参加園・小学校

水福保育園	朝来小学校
岡田保育園	余内小学校
昭光保育園	岡田小学校
平保育園	新舞鶴小学校
タンポポハウス	倉梯小学校
東山保育園	倉梯第二小学校
ルンビニ保育園	高野小学校
八雲保育園	中筋小学校
やまもも保育園	明倫小学校
うみべのもり保育所	福井小学校
中保育所	由良川小学校
西乳児保育所	
朝来幼稚園	
聖母幼稚園	
橋幼稚園	
舞鶴幼稚園	

岡田保育園 公開保育

幼児が「何をやりたいか？」をそれぞれが見つけて遊びに向かっている

～木下先生より～

【シャボン玉遊び】

自分たちで液を作り、工夫できるようにと、用具や液の配合について書かれたものが用意されていた。また、一人で楽しむよりも、友達と力を合わせられるようにと用具は大きなものが準備されており、環境設定の重要性を感じた。繰り返しシャボン玉遊びをする中で、大きくするにはどうしたらよいのか？友達とタイミングを合わせたり、体全体を使ってシャボン玉をつくらしたりする



様子が見られた。その中で、風の向きに気づく子どももあり、遊びにつながる遊びだった。

【園庭の水路作り】

乾燥して硬くなっている園庭に水を流しながら水路を作り続けている遊びも見られた。自分のイメージしていることに向かって、何度も水を汲んできては少しずつ地面をスコップで削っていく。自分が掘った跡を確認して、また、掘り続ける。水を流して楽しむ中で普段色水づくりや泡遊びに発展し、使っている園庭に咲く花を浮かばせる子どももいた。子どもの日々の経験が他の遊びでも生かされていた。



【赤土を使った泥団子作り】

園庭に水路を作っている遊びのそばで水を含んだ柔らかい赤土を手にして団子作りを楽しむ幼児の姿があった。○や△などいろいろな形を作っている。また、泥が含んだ水の量の違いから感触が異なったり、団子の硬さが違ったりすることの発見をしていた。生活の中で形や数量など自然と身につけていく

幼児期の遊びの様子が見られた。



【忍者コーナー】

子どもたちが楽しみにしている行事に夏祭りがある。今年度は「忍者」のイメージを楽しむ、ということ普段の生活の中でも子どもたちは忍者のイメージを持ちながら遊びを展開している。手裏剣を使っての的当てゲームをすることを楽しむ姿があった。普段の生活と行事を線で結ぶことで「行事」に対する思いを大きくし、主体的に参加できるように考えられていた。



【公開保育後のカンファレンスより】

◎シャボン玉の液を自分で作るのはすごい。

◎それぞれにやりたいことがあって生き生きと生活していた。

◎幼児のやりたい遊びが多様なので、準備が大変だと思った。

（岡田保育園より）

◎遊びのルール、生活のルールについては危険なことはしっかりと知らせ、いけないことについても意味を伝えていく。また、どうすればよいのか幼児と一緒に考え合うことも大切である。

◎「～しな」ではなく「～もできるよ」と促しの声かけで自己決定する機会をつくっている。

（木下先生より）

◎与えられた遊びをするのではなく、自分がしたい遊びをするために幼児自らが環境に働きかけることができる適当な環境を用意することが大切である。



舞鶴幼稚園 公開保育

幼児自身が考えながら遊びをすすめ明日につなげている。

～木下先生より～

【年長児の1学期の生活を紹介】

1日の振り返りを大事にして遊び・生活に対する幼児の興味・関心を高めて保育を進める。

＜ザリガニの飼育＞

大切に飼育するために保育者と幼児と一緒に考え合い、自分達自身が動き出せるように取り組んだ事例。

ザリガニを飼育する中で友達と飼育の仕方について考え合ったり、当番活動の必要性に気づいたりしていった。

＜キラキラショップ開店＞

やりたい遊びで楽しんでいたプラバン製作を活用して、幼稚園の夜祭りでお店を出店した事例。店の名前を決める際に、思いを受け止め折り合いをつけることを経験したり、商品以外のもの（看板や名札など）も

必要なことに気づき、どんなものがお客さんに分かりやすいかのかアイデアを出し合い、作り上げた。



【船づくり】

それぞれに作った船をプールで浮かべてみて、自分がイメージしていたことが実現できたか試してみる。予想と違う結果が出た時には、再度作り直す。時には、友達に相談しながら、様々なことを試してみたりして繰り返し改善している姿が見られた。

じっくりと遊びに向き合う時間と空間が保障されており、つまづきに対して保育者が答えを出してしまうのではなく、「なんでかな？」と言葉がけをすることで子ども達が遊びについて考える機会がつけられていた。諦めず、何度も挑戦していく姿が見られていた。幼児同士のかわりや話し合いが大切にされている日常が垣間見られた。



【公開保育後のカンファレンスより】

◎遊びに対する自分のこだわりが感じられる言葉が発せられていた。
◎生活の流れを分かってく自分たちで動き出し、役割を持って行動できる力があると感じた。

（木下先生より）

◎保育者の「次はこれをしましょう！」という言葉で生活がすすんでいくよりも、幼児自身が自ら動き出すことができるようにかかわっていくのがいい。

午後：保幼小連携研修 木下先生の講演とグループワーク

保幼小連携は互いにとって意味があること（互恵性）

いつもと違う集団の中で自己発揮し、相手の思いを聞き、学ぶ、両方が夢中になる

～木下先生より～

【講演：「生活科を通じた保幼小の連携について」

鳴門教育大学大学院 教授 木下光二氏

◎連携は子ども同士、職員同士が交流すること。職員が互いに幼児・小学生が何を学んでいるのかを理解することができる。互いの教育の理解を深め、発達を知り、子どもの育ちを連続的に学ぶ場となる。

◎異なる集団とかわり、相手の気持ちに気づくことができる、相手の思いやることができる機会となるのが連携教育。

◎連携は新たなことを始めるのではなく、実際にやっていることを活用して一緒に活動をしていくと始めやすい。

◎連携活動には幼児にも小学生にも活動のねらいがある。どちらかに合わせてねらいを考えるのではなく、小学生が生活科としてのねらいをもって活動をする中に幼児が参加できる交流になるとよい。

【グループワーク】

参加園・校の中で交流活動をしている関係を大事にしながらグループを作り、これまでの活動内容を振り返りながら年間の連携活動計画を作成しました。互いの教育内容や子どもの実態、園・校の実情

を実際に語ることで具体的に活動内容を考え合うことができました。計画のイメージが共有できると互いに実践につなげようとする気持ちが高まっていくように感じられました。



園見学・研修(講演・グループワーク)を受けて参加者の感想

【園見学について】

◎保育者が主導になるのではなく、子どもに選択させて考えさせることなど、子どもができることは子どもに与える(させてみる)姿勢を真似していきたい。自分で考え、行動する力があり、びっくりしました。

◎環境のすべてが学びにつながっていくのだと知り、驚きました。子ども達が試行錯誤して楽しんで活動しているのが印象的でした。「危ないから、汚れるから」と制限してしまいがちだが、自ら体験して気づくということも大切だと感じました。

◎問題に対して、自分たちで解決しようとしていたり、話し合いをしたりしているので、小学校での話し合い活動も場面や方法を設定すると可能になると感じました。

◎小学校の準備段階と思われる活動や環境があり、1年生への進学もスムーズに行われる工夫を知りました。就学前に行われていた取組や活動を発展できるように努めなければいけないと感じました。

【研修(講演・グループワーク)について】

◎保幼小連携と聞くと、とても難しく大変だと、なかなか積極的には考えられませんでした。他園や小学校の先生達と計画を作る中で楽しくできそうな気持ちになりました。前向きに取り組めるよう努力していきたいと思えます。

◎昨年に引き続き参加しましたが、昨年度よりどの先生も積極的に意見を出し合い、相談し合いながら計画を作成することができて、とても有意義な時間となりました。年々、連携への意識が高まってきていると感じました。

◎小学校がお話立てをしすぎず、幼児がお客さんにならないように保幼小の連携活動は両方が夢中になる、意味のある活動をしなければならないのがわかった。

幼児教育・保育の質の向上研修ニュース

発行日 平成28年2月20日
 発行者 舞鶴市教育委員会
 舞鶴市健康・子ども部

9月15日 やまもも保育園 公開保育を実施しました

やまもも保育園において、神戸大学大学院准教授北野幸子先生にご指導いただき、初めての公開保育を実施しました。

園庭には、大きな木や土山があり、年齢を問わず、水や泥で思いきり遊ぶ子ども達の姿が見られました。また、木製ハウスやその周りではままごと遊び、園庭の隅の方では虫探し…などを楽しむ姿が見られました。広いホールでは、リズム運動をされており、全身を使った活動を楽しんでいました。

普段あまり書くことのない部分指導案（指導計画）を書いて頂いたことで、北野先生から具体的な指導も頂くことができ、参加者にとってもよい機会となりました。また、環境に関しても、より具体的にご指導くださり、今後の方向性も見えてきたように思います。



参加園/校

永福保育園	池内幼稚園
岡田保育園	橋幼稚園
さくら保育園	
平保育園	
タンポポハウス	
なかすじ保育園	
東山保育園	
ルンビニ保育園	
やまもも保育園	
うみべのもり保育所	
中保育所	
西乳児保育所	

それぞれの子どもの興味・関心を見取り、何を準備するとよいのか？どう声をかけるとよいのか？保育者がイメージすることが大事。
 ～北野先生のコメントより～



<土山>
 園の真ん中には、大きな土山があり、年齢の小さい子はそこを這い登り、滑って楽しむ姿があり、年齢の大きい子は、竹のといから水を流して遊ぶ姿があり、それぞれ年齢ごとに遊びを楽しんでいました。

【北野先生より】

- ◎起伏のあるところを登り降りすることで、バランス・重心の移動などの運動能力はあがる。
- ◎竹のといで水を流す時の角度なのか、速さなのか、どこに興味があり、どんな遊びが展開されるのか？イメージや遊びの見通しを保育者が持つ必要がある。
- ◎水を運ぶことで運動能力はあがるが、子どもたちが自分で試行錯誤するためには、距離は短い方がよい。
- ◎環境は、その遊びのねらいや年齢によって変える必要がある。近くにタライを置いてもよかった。



<砂場>

砂場では、1、2歳児の子どもたちが、全身で水や泥の感触を楽しみながら、どろんこ遊びをしていました。陽が当たる乾いた砂、日陰のぬれた砂、ドロドロ、水…砂場の中で、いろいろな感触を五感で感じながら、楽しんでいました。

【北野先生より】

- ◎ペットボトルに水を入れて遊ぶ子、木を入れている子、ふたで水を入れている子、それぞれの子どもの興味・関心を見取り、何を準備するとよいのか？どう声をかけるとよいのか？保育者がイメージすることが大事。
- ◎子どもが取りやすい高さや位置に、サイズの違う容器を準備するとよい。
- ◎1、2歳児への声かけは、感情を引き出すような言葉や共感の言葉を多くかけるとよい。「いっぱい遊べて楽しかったね」「おもしろいね」「やったー」



<ままごと遊び>

木のすべり台の下でお家ごっこを数人の4歳児が楽しんでいました。料理をしようとして子どもがきりがぶを選び、イメージを共有しながら遊んでいました。

【北野先生より】

- ◎イメージを共有するための環境（テーブル、イス等）や教材（おわん、はし、スプーン、おたま等）があると遊びが広がります。
- ◎子ども同士が関わりながら遊ぶには、年齢プラス2人のグループが最適である。
- ◎ごっこ遊びの中で何を育てたいのか？保育者自身が見通しを持ち、意図的に関わるのが大切である。



<園庭環境>

自然を大切にされている園庭には、大きな木や、土山があり、手づくりの楕円や切り株が所々に置かれていました。手づくりの楕円の中に入って遊ぶ2歳児の微笑ましい姿も見られました。

【北野先生より】

- ◎作業するための台がほしそうな子がいるので、丸テーブルを増やすと子ども同士も関わって遊びやすい。
- ◎木があるのがよい。きりがぶの高さがいろいろあるとよい。
- ◎木製や自然にこだわった環境であることはすばらしい。子どもが使う道具や教材は、物によっては重くなり、扱いにくいこともあるので、考える必要がある。
- ◎子どもの興味や関心がどこにあるのか？何を準備すれば楽しめるのか？保育者は何に気づいてほしいのか？によって、環境を構成していく必要がある。

公開保育カンファレンス

保育者が行動する時や子どもに声をかける時に、その先のことをよく考える。

～北野先生カンファレンスより

～北野先生カンファレンスより～

- ◎たくましく、ダイナミックな子どもたち。自然のものを大切に、全身を使った遊びや五感をおおいに使う遊びをされていた。
- ◎身体のたくましさ、ダイナミックさは、心のたくましさ、もっとチャレンジしてみよう！気持ちにつながる。
- 【保育士のかかわり】
- ◎「○○だね」という共感の言葉や「いっしょに～しよう」という共有の言葉、「どうして～なったのかな」という問いかけの言葉を心がける。
- ◎保育者は、他者への関心を深めることを意識し、子どもをつなげる声かけをする。○○ちゃんのしていることを○○ちゃんにも伝えることが大切である。
- ◎全体に子どもがしゃべっていない印象。
- ◎保育者がものを運ぶ時、給食に配る時など、自分の気持ちを添えて子どもに話すとよい。



◎子どもの行動の先取りをするのではなく、子ども自身が行動

- できるように見守ったり、共感したりする。
- ◎保育者が行動する時や子どもに声をかける時に、その先のことをよく考える。
- 【環境】
- ◎前回訪問時の助言をいかして、保育者の手作り本棚ができていたが、子どもの反応はどうだったか？をよく見ておく必要がある。
- ◎第1段目におく本は、最近興味があったものにするとうい。また、表紙が見えるように置く。
- ◎乳児の保育室の環境は、色・形・音に配慮する。
- 【指導案】
- ◎保育は、シナリオ通り（指導案）にすすまなくてもよい。子どもの興味関心によつてすすめる。
- ◎活動の起点は子どもからであることが大切。
- ◎事前に保育者がどれだけ考えているか、指導案の中で、「明日、○○ちゃんはどうしたいか？」を考えてみる。
- ◎指導案は、書けば書くほど楽になり、うまくなる。実践も楽になる。予測して環境

- 設定することが大事。
- ◎子どもの姿～ねらい～環境設定、援助→（達成するためにという）視点があるとピックアップしやすい。
- 【食事】
- ◎食べる時もその年齢発達を意識する。
- ◎「早く食べさせたい、いろいろ食べさせたい、行儀よく食べてほしい」保育者の思いや、「食べた、食べなかった」という技術面の言葉がけが多くなりがちである。
- ◎「おいしいね、楽しいね」と肯定的な言葉をかけ、楽しく食べることを心がける。
- ◎食べさせることに力入れすぎず、楽しく食べることや、食べ物を知るところを大切に。
- ◎気持ちを育てるのが1番大切。食べ方・技術的なことは年齢に応じて伝える。
- ※今日の保育は楽しかった？子どもが楽しめるような、子どもが楽しみを見つめるような保育に。

ドキュメンテーション研修

各園で書いていただいているドキュメンテーションを元に、担任している年齢ごとのグループに分かれて、グループワークをしました。北野幸子先生と懇話会副会長の清邊和成先生（兵庫教育大学大学院教授）にも入っていただきました。

【テーマ】

「ドキュメンテーションから見える保育について」

【方法】

ドキュメンテーションを見て、各自、「きっかけ」「遊びの中の学び」「保育者の意図とかかわり」「環境」などの項目の入ったワークシートに記入し、整理したものを発表し合う。



【グループとドキュメンテーション】

- 0、1歳児：「感触あそび」うみべのもり保育所
 - 2歳児：「だんごむし」平保育園
 - 3歳児：「色水遊び」中保育所
 - 4、5歳児：「ありの観察」平保育園
- グループごとに「この遊びのねらいは難しいのではないかと」「この声かけがきっかけになっている」「結果だけでなく、子ども同士の話し合いの場面を書く方がよい」など、保育を語り合い、お互いにより刺激になりました。

※各年齢ごとにドキュメンテーションを書く上で、また、保育する上で大切なことについて、北野先生からアドバイスもいただきました。（下記に記載）



書くことだけでなく、どんな保育をするのか、子どもの事実をみて考える
～北野先生より～

- ◎ドキュメンテーションは、なぜこの場面を選んだのか、何を伝えたいのかが大切であり、箇条書きにしてみるとよい。
- ◎子どもの事実をとらえて保育する。書くことだけでなく、どんな保育をするのか？子どもの事実をみて考える。
- ◎子どもがどんな興味を持ち、どんなことしたいのかを見抜くことが大切。
- ◎発達をわかっていることも重要。先生の願いや意図を持って、教育的援助をすることが、実践につながる。
- ◎ぜひ、ワークシートを園内の保育を語る場で使ってほしい。

- 【年齢ごとのドキュメンテーションで大切にしたいこと】
- ◎0歳・・・発達、居心地、安心、安定、五感（色、形、音）、愛着について伝えると共に、保育者はどういう意図を持っているのかも伝える。
- ◎2歳・・・発達の段階として、自己主張、自我の時期であることやそのかかわりについて伝える。
- ◎3歳・・・「なんでもやってみよう」という意欲の多様性や、「できた、できない」の結果ではなく、何に関心をもったのか、何に共感したのかを伝える。

- ◎4・5歳・・・人とかかわりや共同的に遊ぶ、学ぶ姿を伝える。興味もつたことが、将来の姿につながる。

幼児教育・保育の質の向上研修ニュース

発行日 平成28年2月20日
 発行者 舞鶴市教育委員会
 舞鶴市健康・子ども部

10月15日 タンポポハウス 公開保育を実施しました

タンポポハウスにおいて、神戸大学大学院准教授北野幸子先生と兵庫教育大学教授溝邊和成先生にご指導いただき、公開保育を実施しました。

幼児は週に一度、クラスの年齢を問わず、子どもが自分のしたい遊びを選び、楽しむ日を設けておられ、この日はその活動を見せていただきました。

これまでの遊びから、子ども自身が“やってみよう”“つくりたい”と思えるようにと、保育者が豊富な素材や道具を準備したり、発想やイメージを表現できるようにと環境を整えたりと、取り組んでこられました。この日も、好きなところで自分のイメージしたものを作り、作ったものを使ってのごっこ遊びや、作ったものを身につけて表現する遊びなど、様々な遊びが広がり、つながっていく様子が見られました。

どの年齢も、とても丁寧に指導案を書いておられ、北野先生からも「ただ遊びを見守るだけでなく、そこの中にある育ちを見ようとしている指導案だった」との言葉をいただきました。保育を考えること、想定や予測をして保育に臨むことの大切さを、改めて学ぶ機会になったのではないのでしょうか。



参加園

- 岡田保育園
- さくら保育園
- 昭光保育園
- 相愛保育園
- 平保育園
- タンポポハウス
- 東山保育園
- ルンビニ保育園
- 八雲保育園
- やまもも保育園
- うみべのもり保育所
- 中保育所
- 西乳児保育所
- 倉梯幼稚園

物の数や量が程よく、あそびを想定して準備していることがわかる考えられた環境
 素材や教材の豊かさが、考え、選ぶこと、遊びを楽しむことにつながる ~北野先生コメント~

<環境>

各コーナーに様々な素材や教材、道具が取り出しやすいように準備されており、子どもたちが作りた、作ったもので遊びたいと思うような環境づくりをされていました。



素材に応じて道具を使い分ける姿や、慣れた手つきで操作する様子が見られ、普段からイメージした物をつくり、表現するという保育が展開されていることが伺えました。

【北野先生より】

◎好きな時に好きなことができて良い。させるための環境ではなく、したいと思えるような環境だった。

◎物の数や量が程よく、あそびを想定して準備していることがわかる考えられた環境。

◎素材や教材の豊かさが、考え選ぶこと、遊びを楽しむことにつながる。

◎子どもの興味・関心を起点に、保育者が育てたい力をイメージしながら素材や教材を準備する。



◎音響（GDデッキ）がお客さんに聞かせるためという視点ではなく、踊っている子どもたちが楽しく踊れるようにと考えられていた。子どもからの視点になって環境を整えることが大切。

<乳児の保育>

【北野先生より】

◎行儀の良さを求めるのではなく、意思表示をたくさんさせていく。即行動に結びつくのが乳児期の姿。いざこざを通じて育つという視点を持ち、そのつど丁寧に間わり自己主張や自我の芽生えを大切にしていく。

◎手作りおもちゃは、子どもの様子、楽しみ方をみながら、色、形、音、数を工夫して作ったものが育ちや学びにつながる。

<ままごとコーナー>

3歳児が中心にままごと遊びを展開。語彙豊かに、やりとりがなされていた。4、5歳児は作った食材を見学している大人に配る等、遊びが広がる様子を見せてくれた。

【北野先生より】

◎ままごとコーナーに素材があることで、食材づくりができる。レストランやお店屋さんなど、次の遊びへの発展につながる。

◎次は調理道具と食器の数を充実させることで、遊びに広がりが見られる。



<テラスでのダンス>

衣装作りをしていた子どもから「おどりたい」という声上がり、そこから、手作り衣装を身につけてのダンスや歌のステージに広がる。

【北野先生より】

◎子どもの様子から、臨機応変に相互作用で一瞬に作っていくのが保育の醍醐味。

◎主役は子ども。行事も同じ。見る人にとってではなく、子どもにとってどうか、子どもが楽しめているか、そこで何を学んでいるか、という視点をもつ。



公開保育カンファレンス～北野先生コメントより～



部分指導案で書くことによって、遊びの中で子どもの興味・関心を洞察し、教材と環境と子どもの相互作用を援助する力がついてくる
 評価の観点を持つことで、ねらいが達成されているか、自分の関わりや環境がどうだったかを構造的に評価し、振り返ることができる

【指導案について】

- ◎指導案から子どもの主体性を尊重して、洞察しながら、子どもとつくる保育をする力をもっていることがわかる。この日の保育の中に指導案そのものが出ており、考えて書かれたことが実践されていた。
- ◎“明日何しようか” “どこに何を置こうか”と思っていることを日案や部分指導案で書くことによって、遊びの中で子どもの興味・関心を洞察し、教材と環境と子どもの相互作用を援助する力がついてくる。
- ◎計画の段階から評価の観点をもつことで、ねらいが達成されているか、自分の関わりや環境がどうだったかを構造的に評価し、振り返ることができる。

【保育者の援助について】

- ◎時間だから片付けになり、ステージが終わった。子どもたちも誰も反対せずにスッと終わった。そこに保育者も子どももまじめさを感じる。小学校教育と保育の違いは、子どもと一緒につくる部分大きい。



シナリオ通りにいかなくても子どもと相互作用で、時間の尺や教材の使い方等、予定と違う行動があつてよ

い。

- ◎「～せねば」「～すべき」ではなく、子どもの様子から臨機応変に相互作用で一緒に作っていくのが保育の醍醐味。保育者がリラックスして、肩の力を抜いて楽しむ。
- ◎3歳児には、まず保育者のモデルが必要。豊かな表現と楽しさを示し、次は促し、考える予知を与えること。選択肢を提示し、選ぶ機会や工夫する機会を持つ。

【振り返りについて】

- <3歳児>
- ◎子どもの方から出てくるように問いかけの言葉を増やす。
- ◎「こんなバック作りたい人手を挙げて」と先生が完結してしまうのではなく、「じゃあどんなの作りたい？」など質問を増やし、言いたい気持ちを育てていく。
- ◎言葉の語彙を増やす為には大人が語彙豊かにしゃべることも大事。大人がしゃべるときには「〇〇ちゃんは〇〇な気持ちだったんだよね」など、主語を子どもにして話をしていく。
- <4歳児>
- ◎紹介だけでなく発展させるためには、とりあげるトピックスが大切。
- ◎発表者だけに注目するのではなく、見

き手に何が育っているのか、どんな力をつけたいのか、ねらいを明確にする。

- ◎「～して下さい」「じゃあ次は～」等シナリオや手順、期待していることが保育者の中にあつて当然だが、言葉としては減らしていけるとよい。
- ◎集中して話が聞けるのは20分程度。全員を取り上げなくてもよい。数人の子を取り上げ、取り上げたときの反応をつなげていく。20分間で展開するイメージを持つ。
- <5歳児>
- ◎5歳になると自分がした遊びを保育者に話すのではなく、友だちに話す。誰に向かって話しているかを見ていく。
- ◎聞いている時のリアクションを見て、話をつなげる。話に加え、体験できる機会を作ることで、興味や理解につながる。
- ◎子ども同士をつなげるということは、言葉だけでつなげるのではなく体験や感情（共感する）をつなげる。



公開保育カンファレンス～溝邊先生コメントより～

【異年齢集団について】

- ◎年少が年長から、どんなアドバイスももらうのだろうという期待と、自分のしたいことをサポートしてもらいたい、という関わりが大事。
- ◎年長が下の子どもにしていることはすべて先生がしていることを真似している。保育士がいかに見守るか、任せるか、声かけをいつするのか、ということを実践していくと、子ども同士の関わりにも、発展がみられるようになる。

【保育について】

- ◎ステージでサンドイッチがくばられ、タイミングを見計らい、回収までしてくれ驚いた。子どもが主体的に、この場面ではこういうことをしたらいいんじゃないか…ということを考え、遊びの中で展開していける保育がよい。
- ◎サンドイッチの中身をあえて聞くことで、何が入っているかを理解、認識して分別できる。また、説明できるような対応をすることで、小学校以降の学習につながる。

【振り返りについて】

- ◎時系列の視点を留意する。写真等で提示することで、昨日からの変化の気づきにつながる。今日の頑張ったことの1つの視点となり、称賛されたり、自分が自慢できたりすることにもつながる。



平成27年度 第9号

幼児教育・保育の質の向上研修ニュース

発行日 平成28年2月20日
 発行者 舞鶴市教育委員会
 舞鶴市健康・子ども部

11月11日 東山保育園 公開保育を実施しました 日本保育学会 課題研究委員会の視察も受けました

今年度5回目の公開保育を東山保育園で実施し、神戸大学大学院准教授北野幸子先生にご指導いただきました。東山保育園での公開保育は3年目となり、子どもの主体性を大切に、子どもの言葉ややりたい気持ちを起点に保育が展開されている様子や、夢中になって遊び込むための環境作り、保育士の関わり、ドキュメンテーションなど、前回よりも更に変化が見られました。子どもを主体としたプロジェクト型保育について、更に学びを深められ、日々取り組んでおられる様子が伺えました。

また、日本保育学会課題研究委員会の委員による今年度2回目の視察も受けました。「全国的に保育の量的拡大は進んでいるが、質の維持・向上を図るのが今の課題と考えている。舞鶴市の取り組みが、全国のモデルとなり、その一助となるのではないか」とのご意見もいただきました。

さらに、公開保育に引き続き、カンファレンス、ドキュメンテーションの研修でも貴重なご意見をいただきました。



参加園/校

永福保育園 余内小学校
 岡田保育園
 さくら保育園
 相愛保育園
 平保育園
 タンポポハウス
 なかすじ保育園
 東山保育園
 ルンビニ保育園
 八雲保育園
 やまもも保育園
 うみべのもり保育所
 中保育所
 西乳児保育所

「問い」と「予測の期待」が保育者の中にあり、そして、保育者と子どもとの相互作用で保育をつくる ～北野先生のコメントより～

<0歳児：ダンボールハウス>

大きなダンボールハウスに小窓を設け、「いないいないばあ」遊びが出来るようにしてある。覗きたくなる良いサイズの小窓から顔を出す、それに応える保育士の姿。

実は以前は子ども達が興味を持つようにと動物を貼ったりしていたが、それを貼ったテープをはがすことに興味がいき、意図した遊びとは違う方向になってしまったと、担任より伺った。

【北野先生より】

◎予測の期待がはずれることがあるのは、そこに保育士の思いがあるから…。予測と異なることを認め、取り入れることが、まさに子どもとの相互作用でともに保育をつくり上げることにつながる。



<2歳児：小麦粉粘土遊び>

床に置いたテーブルの上でこねたり、丸めたり…。グッと力が入るし、また床とも違う絶妙の環境。机ごとに違う色の粘土を配置することで交換が始まる。「固いー柔らかい」「冷たいー温かい」両方が感じられる工夫もある。自分達の探ってきた木の実や畑で作ったピーナツを使ったケーキ。愛着があって更にイメージが広がる。保育士も「誕生日だね」とか「あげるよ」などと応答的に関わり、子どもの言葉や思いに寄り添っていた。

「大人がいても気にせず、2歳児がこんなにも遊びに集中している…子どもが認められ、受け入れられている…幸せそうでよかった」

(課題研究委員会委員：猪熊先生談)



<4、5歳児：木片遊び>

年長児は、木片を釘で打ち付けてモノ作りをしている。色々な長さの釘、ポンド、用途によって使い分けながら最適な道具を選んで使う力が身に付いてきている。それに憧れる年中児の姿。また、年少児は、その木片を並べて線路に見立て、電車ごっこが始まった。同じ素材でも年齢ごとに遊び方が異なる。

【北野先生より】

◎素材が豊か。今日は環境を考えさせられた。

◎今後、物と物とくっつけるだけでなく、のこぎりを使うのもおもしろい。木片・釘+αで、協同的な遊びに発展しよう。



<振り返り>

4、5歳児は15人程のグループに分かれて、今日の保育の中で楽しかったことなどを発表している。

【北野先生より】

◎グループの人数はよいが、他のグループの声が聞こえてしまうのは集中を妨げてしまうのもったいない。

◎個々ではなく、みんなの話題にしていく。

◎年長児になると、協同的な学びができていく時期。何かを深めていくという方向に共感を集めていくことが必要。



公開保育カンファレンス

保育には“キリ”がない、探究してもしきれない課題が保育になる
～北野先生より～



【保育】

◎環境を通した保育には、記録と環境構成が重要で、それにはそれ相応の時間を要する。
◎（全員が逆上がりができるようになったという話があったが、）外部講師を頼むよ

り、環境構成の工夫でできるようになる。
◎「結果だけでなくプロセスを」それが保育の醍醐味。どのようにしてそうなったのか？そこに眼差しを向ける。結果、その方が力がつく。
◎子どもとの相互作用で保育を作っていく。子どもを見よう、発達を見ようという姿勢と「問い」が保育者の中にあつた。また、「こうなればいい」という「予測の期待」も必要。「問い」と「予測の期待」を待ち、予測が裏切られると尚うれいという気持ちで保育に臨む。

◎3、4、5歳児の相互作用を保育者がつなく、気づきを促し、誘いかける。
◎指導案の「評価の観点」は、ねらいにしぼって書いてみるとよい。
【ドキュメンテーション】
◎クラスの姿をそれぞれの保育者の視点で見たものをドキュメンテーションにして共有しているから1人だけ複数の視点で見ている。思いや価値観を共有する面でもドキュメンテーションは有効。

遊びがつながり、展開が見られたのは、子どもが主体だからこそだと思う。

～日本保育学会 課題研究委員会委員より～

【保育・環境】

◎子ども達が遊びたくなるような素材がたくさんあり、「子どもがどんなことを楽しいと思っているのか」を普段からよく見ておられるんだと感じられた。
◎一人の子どもの視点に立ち、その子にとって意味のあるものにしていくことが大切。
◎素材を上手に使っており、3～5歳の環境でのこだわりが見られた。これから「子ども側から環境を作っていく」となっていくと、尚、素晴らしい。

【ドキュメンテーション】

◎ドキュメンテーションの中に考察がある。浅い深いはあるが、それが1番勉強になる。それを保護者に伝えることの大切さ。子どもの興味を理解してもらう手掛かりにもなるし、発達の流れを共有することにも付与する。
◎ドキュメンテーションも環境も丁寧である。昨日の保育とつながっている。

【意見交換】

Q1：公開保育をするきっかけ
A：職員の意識を変えていきたいが、どうしたらいいかわからなかった。とにかくやってみよう（園長より）
Q2：3年前とどう変わったか？
A：ドキュメンテーションを書くようになってから、保護者にもわかりやすく伝えるために写真で可視化していくことで、発達や教育的意図などが意識付けられた。そこが1番変わった。公開保育を受ける中で、チームワークを今まで以上に大切に、より良い保育をしていこうという機運が層高まった。
Q3：自分たちで自然に片づける姿が印象的。片づけ方の工夫は？
A：初めは片づける場所を細かく区切っていたが、駄目だった。まず、大まかにして

ザッと片付ける。手伝ってくれた子を振り返りの中で取り上げ、初めは言っただけなのに片付けていたのが、今は自然な姿になっている。
Q4：悩みは？
A：ドキュメンテーションについても、日々なかなか時間がとれないが、今日したことは今日可視化しとかないうちのうちに振り返るようにしている。時間が無いのが悩みだが、子ども達が変わってきている実感がある。



ドキュメンテーション研修

育ちや学びは何ができたか、わかったかではなく、「やってみよう」という意欲や「知りたい」「わかってうれしい」気持ちを取り上げる
～北野先生コメントより～



今回のドキュメンテーション研修は、前回同様、年齢ごとにグループを作り、1つのドキュメンテーションについてそれぞれが意見を出し合う形で研修を進めました。ワークシートを使い、「きっかけ」「育ち・学び（根拠となる子どもの姿や言葉）」「年齢・発達」「環境」等視点を定めて話し合いを進める中で、より保護者に伝わりやすくするために押さえるべきポイントや、また違った視点で保育を展開していくヒントや気づきを得ることができました。

5歳児のドキュメンテーションは、公開をした東山保育園の事例を取り上げ、検討しました。
◎きっかけ：解体した遊具を大切にしたい保育者の思いと、「なんかつくれそう」の子どもの言葉から始まった活動。
◎保育者の意図：トーンボール作り（表現活動）から、子どもとのやりとりをしていく中で、くぎ打ち遊びへ広がっている。
◎学び：どうしたらまっすぐにくぎが打てるのか考えたり、板の厚さとくぎの長さの

バランスを考えたり、そこには様々な学びがあった。
◎子ども：年長児が年下の子に教える姿があり、保育者が指示しなくても子ども達が活動をすすめる姿がある。
◎環境：「くぎ打ちがしたい」など、保育者が子どもの興味や関心を取り上げながら、環境を整えている。
◎今後の展開：グループで協同して大きなものをつくる。
◎約束事も保育者が決めてしまうのでは

なく、子どもと考えるものよい。



日本保育学会課題研究委員会委員の皆さん

平成27年度 第10号

幼児教育・保育の質の向上研修ニュース

発行日 平成28年2月20日

発行者 舞鶴市教育委員会

舞鶴市健康・子ども部

12月1日(火) 朝来小学校・朝来幼稚園 公開授業・保育を実施しました

保幼小連携活動について学ぶため、朝来小学校と朝来幼稚園の公開授業・保育を実施し、鴨門教育大学大学院教授木下光二先生にご指導いただきました。

保育所・幼稚園・小学校から約40名の参加がありました。

朝来小学校・朝来幼稚園が、木下先生のご指導を受けて連携活動の公開を行うのは、今回が初めてですが、交流・連携活動は以前からされており、今年度も春から小学校と幼稚園とが一緒に年間の計画を立て、この公開までに何度も一緒に活動をされています。

参加園/校

岡田保育園	朝来幼稚園
さくら保育園	池内幼稚園
平保育園	倉梯幼稚園
タンポポハウス	三鶴幼稚園
なかずじ保育園	朝来小学校
東山保育園	岡田小学校
ルンビニ保育園	志来小学校
八雲保育園	新舞鶴小学校
うみべのもり	高野小学校
保育所	中筋小学校
中保育所	吉原小学校
西乳児保育所	与保呂小学校

<公開授業・保育>

場所:朝来小学校

9:40-10:50 連携活動 公開授業・保育

11:00-12:00 カンファレンス

～生活科学習指導案より～

【学 年】小学校第1学年:31名、第2学年:17名

幼稚園 年長児:14名

【単元名】あそびのフェスティバルをたのしもう

【本時の目標】

1年生:年長児や2年生、友達と協力し合ってお店屋さんを開き、遊ぶ楽しさに気付くことができる。

2年生:みんなが楽しめるように、年長児や1年生、友達と協力し合ってお店屋さんを開き、自分や友達のよさに気付くことができる。

年長児:1、2年生や友達と相談したり、役割を分担したりして遊び、自分の思いを伝えながら、様々な人とかかわって楽しく遊ぶ。

【本時までの経過(抜粋)】1年生、2年生、年長児が混合で8つのグループに分かれて、それぞれのグループごとに

→どんな遊びのお店を開きたいか具体的に話し合い、計画を立てる

→計画に沿いながら、「あそびのフェスティバル」に向けて、遊びや遊びに使う物を作成するなど、お店の準備をする

→お店の遊びを試し、気付いたことから工夫できることを話し合い、ルールの変更や追加で必要な物を作成する

【本単元以前(春から)の連携活動】

◎1、2年生で幼稚園を訪問、自己紹介をし合い、一緒に歌や遊びを楽しんだ。

◎幼稚園の畑へ行き、サツマイモの苗と一緒に植えたり、収穫を一緒に楽しんだりした。

<活動を通して>

2年生:昨年を思い出し、自分なりに1年生や年長児に声をかけ、思いやりを持ってかかわろうとする姿が見られた。

1年生:小学校の中では一番年下だが、年長児とのかかわりの中で、優しく接していこうという気持ちを持って、取り組む姿が見られた。

年長児:1、2年生にすっかり打ち解けている様子が伺えた。



連携活動「子ども達がどれだけ自己発揮できているか」 ～木下先生カンファレンスより～ 「先生と一緒にやって何を学んでいるか、幼稚園は小学校から、小学校は幼稚園から」

各指導者より

【2年生】

◎毎回自分達で考えて、司会やあいさつをしていて、子どもも司会が好きで、どうしたら伝えるかを考えている。2年生の司会を見て、1年生もどう話ればよいか分かってきた。

◎自分達でお店の約束やルールを決めた。年長児や1年生がリードしている場面もあったが、一人でいる子に声をかけたり、気にかける場面もあった。

◎振り返りの場面で、来年度に向けてこんな風にしたらい、ということを書いたらよかった。

◎担任の出番がないくらい楽しめていた。

【1年生】

◎いつもはお世話してもらって立場から、年長児の面倒をみる姿も見られるようになり、回を重ねるごとに年長児をリードする姿も見られた。上にも下にもいる状況。どちらの役目も必要。

◎2年生の司会を見て学んで今後にいかしてほしい。

◎もぐらたたきは疲れるので、2年生が1年生に「休憩しときな」とやさしく声をかけていた。それを見て1年生も年長児と同じことをしてい

た。

【幼稚園】

◎今回に向けて9月から4回学校に行った(それまでも交流あり)。

初めて学校に行った時には、教室に入ると緊張する様子があったが、交流の中で大きい子達にやさしく声をかけてもらったり、休み時間に一緒に遊ぶ中で緊張も取れてきた。

幼稚園でおとなしい子が小学校では力が発揮できたり、その逆もあった。

◎お店のお金作りは、何か出来ることはないかと幼稚園の子ども達だけで作った。「喜んでもらえるかな」と心をこめて作っていた。

◎1年生、2年生、年長児関係なく、ルールを説明したりしていた。

参加者からの質問

【Q1】子ども達が主体的に活動し、ルールを変えながら進めている姿があつて良かった。本時までに15時間も時間をとっておられる。自分の経験では(招待された年長児が)お客さんになってしまうことが多くあつたが、こちらは相談している姿が伝わってきた。今日にいたるプロセ

スを知りたい。

年長児が来るまでに準備を進めておられたが、そこを年長児も一緒にすることでワクワク感を一緒に味わうとまた変わるのではないかなと思う。

→【A. 2年担任】

◎木下先生が「できることからつながりを」とおっしゃっていた。昨年度は当日だけの取り組みで、年長児はお客さんになってしまっていた。今年は一緒にできるよう、調整は難しかったが、4月に幼稚園に行き、みんなで年間計画を立て、スケジュール通りに行った。

◎子ども達は、作ることの楽しさ、教えてあげる喜びを感じられたと思う。振り返りも一緒にやることで違ってくる。

【Q2】連携活動では年長児がお客さんにならないことが大切。今日のはお客さんにならない取り組みで良かった。年長児は上の子を見て自信を持ってお店屋さんをやっていた。招待するのは簡単だが、一緒にするのは大変だと思う。準備する段階で、それぞれにどんな役割があつたのか。

ー[A. 2年生担任]

◎2年生がリーダーとなり、1年生はこれ、年長児はこれ、と仕事を割り振った。役割分担は2年生がした。幼稚園には事前に、何班は〇〇と表にして渡した。

[年長担任]

◎幼稚園に何を準備するかの書類がきて1回目やってみたら、学校も幼稚園がこれくらいできると分かって、次から内容が変わっていった。最初何をしたいか分からなかった子がいたが、次の時に1、2年生に「何をしたいか聞こう」と言って取り組み、「初めてガムテープを切った。」など子ども達は喜んでた。

[幼稚園長]

◎年長児は参加、遊ぶということだけでなく、一緒にすることが必要と思う。
◎年間を通した計画と活動が必要。
◎連携活動は幼稚園と小学校とが一緒にやるものなので、幼稚園がこうしようと思っても、相手がこうと言うとできないこともある。そこが聞いてもらえるところからできた。大変だがやりがいがある。

[木下先生]

◎連携活動では、幼児がどれだけ自己発揮できているかを見る。
◎開会式はちゃんとしすぎて楽しそうじゃなかった。しかし始まったら、缶が倒れたのをずっと置していた子や、何度も遊びをやるよう釣竿を渡してくる子などいて、自己発揮できていた。
◎今日だけの活動じゃなかったからできた。継続の中で「安心感・自己発揮・自己肯定感」が生まれて今日があった。これからが楽しみ。
◎連携で大切なのは、先生と一緒にやって何を学んでいるか。幼稚園は小学校から、小学校は幼稚園から。何を学んだか聞かせてほしい。

ー[年長児担任]

◎学校は遊びの中でも授業として学びを意識されていた。幼稚園にもカリキュラムはあり、遊びの中で学ぶことが大切だができておらず、自分の認識が甘かったと感じた。

[1年担任]

◎あいさつや礼儀など、1年生でできていないことが年長児ではすぐできていたと思った。
◎幼稚園の先生が子ども達へやさしく丁寧に声をかけられており、見習いたいと感じた。
◎年長児が、活動の最後の振り返りで意見が言えるのはすごいと思った。

[2年担任]

◎年長児にどんなことができるか分からず、最初は簡単なことをさせていた。見ていたらもっとできることがたくさんあるのが分かった。小学校に入るまでここまでできるんだと感じた。簡単に分かりやすく話すことを学んだ。



[木下先生]

◎保育所・幼稚園の時にどう育て入ってくるのかを知らないと、ここまでできるなら小学校ではここから始めようというように、スタートが多少違ってくる。

◎朝、小学生が準備をして幼稚園の到着を待っていたが、その時間がもったいない。年長児も来て一緒に運んだり、準備すればよい。

◎静かなところで店の説明が必要だろうか？ポスターもあるし、見て「あそこおもしろそう。」と思って行ってい。実際の祭りでもお店の説明はなく、あそこ楽しそう、行ってみようとなる。無駄な時間を省けばもっと長い間子ども達が一緒にいられる。指導者よくできていた。無駄を省いて必要なことをやっていくことで良くなる。かたく考えずにもっと子どもにまかせるとよい。

◎連携事業となると「5歳児に何かおあげよう。」となるが、いつもやっているところに5歳児が入るだけでいい。幼小の違いにこだわらないこと。買物だけでなく作るところにも入る。幼児が困ってもよい。困って考えることで成長につながる。そして5歳児が入ろうと入るまいと生活科は生活科。大事なものは「気づき」、「もの・こと・人のかかわり」。ねらいは変わらない。

◎お店屋さんのお金は、算数セットのお金でもよいのでは。接続カリキュラムに算数の要素が入ってもよい。2年生はお金を数えられる。それを見た1年生や年長児はすごいと思う。1年生や年長児が計算できなくてもよい。数えるって楽しい！と思うことが大事。年長児も楽しく数を数える経験になる。

◎ゲームも数や量、ワークシートで何点になったか、迷路ならどのチームが一番早かったかタイムを競うなど、活動に数量の要素が入るともっとおもしろい。

◎ゲームのところで、紙飛行機を飛ばすだけで

なく、お客さんが自分で折って飛ばしてみるとか、釣竿も自分でひもをつけてからやるとか、「もの・こと」へのこだわりが入るとよい。学びの要素を取り入れる。

◎自分は交流活動のときに1年生担任として、子ども達に「優しくなさい」と言わないようにしていた。普段から優しくするのはあたりまえ、今日だけじゃない。普段から優しい子に育てる。

◎振り返りの場面で、幼稚園児と1・2年生がみな「〇〇して楽しかった。」等同じようなことを言っていた。「その楽しかったっていうのはどういうこと？」と先生が聞くと答えが広がり、国語科につながる。

◎振り返りの時に、幼稚園の先生は「どの子のどの姿が一番良かったか」を伝える。1・2年生の先生は生活科の観点で、「どの子のどの気づき良かったか」を伝える。名前なども具体的に伝える。保育・教育で目指しているものを伝える。そうすると次の活動が変わってくる。

◎連携活動は、無理のないことをしないと続かない。作ることを子どもにまかせるといい。下手でもいい。普段やっていることをやる。子どもにまかせてしっかりと活動させてあげることが大切。

◎自然物があるとよい。秋なので、どんぐりや落ち葉等使ったのではないが、10円玉の代わりにどんぐりでも良かったのでは。

◎1日入学体験で、幼稚園児のために土産まで作ったりするところがあるが、1年生の普通の生活を体験させればよい。

◎連携から接続へ。年間スケジュールを作って活動されている。接続カリキュラムに近付いている。

◎連携の前、それぞれの保育・生活科がある。一緒に合わせる回数が多い方が仲良くなって自分達でいろいろ解決できる。

◎この後の連携は？

(ー[小学校]3月に昔の遊びをやる予定。)
今日の店も、すぐろく・ケン玉・ヨーヨーでもいいと思っていた。縄跳びもいい。クリスマスリース、保育所・幼稚園のもちつきに小学生を招待するのでもいい。

<カンファレンス後、木下先生のことばより>
(朝来小学校と朝来幼稚園の)学校の先生と保育所・幼稚園の先生とが、「今日の〇〇ちゃん、こうだったね。」と言って、お互いに誰のことか分かって話している。単なる一回の交流ではなく、いい連携活動ができている証拠。

幼児教育・保育の質の向上研修 現地研修(鳴門教育大学附属幼稚園 幼児教育研究会)を実施しました。

平成27年11月21日(土)に鳴門教育大学附属幼稚園の幼児教育研究会に参加しました。大型バスで早朝の出発となりましたが、約40人が参加されました。

公開保育見学会、全体会での研究発表、分科会が行われました。団塊世代の大量退職など、若い世代への保育・経験の伝承が全国的にも課題となる中、保育キャリア、経験年数からアプローチした内容となっていました。

帰りのバスでは、公開保育や研究会の中で、自分が見聞きし、感じ、発見したことを各参加者から発表する振り返りを行い、多くの学びを共有することができました。

<参加園>岡田保育園、平保育園、タンポポハウス、八雲保育園、ルンビニ保育園、昭光保育園、うみべのもり保育所、中保育所、西乳児保育所、朝来幼稚園、舞鶴幼稚園
<内容>1. 公開保育 2. 研究発表
3. 分科会※保育キャリアによる選択
4. 黒板「育つ育てる保育の未来」

公開保育を見た参加者からは、「子ども達の目にすぐつく場所に野菜等が植えられていた。類似したものを少量ずつ植えることで子どもに気づかせる工夫があった。」「材料や道具などが分けてテーブルや棚など子ども達の手のすぐ届くところに置いてある。」「秋ならではの木の葉や葉

材、絵本が置いてあった。」「時間がきても片付けましょうではなく、「そろそろ仕上げてね」、「完成形にしてください」等の声かけがなされ、「何時までに片付けよう」ではなく、「何時になったら次の〇〇をしよう」と子ども達が主体的に動く声かけになっていた。」等の感想が寄せられました。

また、分科会や黒板では、登壇者から「保育者の育成も子どもの育成も同じ。プロセスが大事。」や「私が何かをすれば子どもが育つと思っていたが、子どもとつくる、子に寄り添うへ、原因と結果的考え方から、子が何を通して何をしていたのか？という考え方に変わった。」等の発言がありました。

平成27年度 幼児教育・保育の質向上推進事業
実施報告書

舞鶴市健康・子ども部 子ども育成課
〒625-8555 京都府舞鶴市字北吸1044番地
TEL 0773-66-1009

本報告書は、文部科学省の「幼児教育の質向上に係る推進体制等の構築モデル調査研究」の委託費による委託業務として、舞鶴市が実施した平成27年度幼児教育の質向上に係る推進体制等の構築モデル調査研究の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。